第三章　おとなたちの言葉

1.

ひとみは霧の中を走っている。

――結局、崇嗣に何もしてやれなかった。

幸奈はさんざ暴れた後、脱力して動かなくなった。そして若先生は、この女性は自分が見ているから崇嗣君を頼む、と言ったきり、診療用ベッドに寝かせた幸奈の横に腰を据えてしまった。呆れて何も言う気にならない。ひとみは崇嗣の後を追って、診療所を飛び出した。

さて、崇嗣はどこへ向かったのだろうか。そもそも行くところなど大してない。自宅に帰れないのだから、一人になれる場所は神社か、学校といったところだ。神社なら、祖父の神主さんに見つかるかも知れない。すると、学校だろうか。

そんなことを考えながら少し行くと、いきなり見知った顔に出会った。霧で前が見えなかったため、ぶつかる寸前で辛うじてひとみは立ち止まった。

「ひとみちゃん？」それは、陽の母だった。「どうしたの、そんな急いで」

「あ、宗像さん、あの、崇嗣君見ませんでした？　こっち来てないかと思って」

「さあ、私学校から歩いてきたけど、会わなかったかな。どうかしたの、崇嗣君」

「ちょっと色々あって、いなくなっちゃって」

あんな面倒ごとを伝えるのは気が重い。

「あら、崇嗣君も？　うちの子もどっか行っちゃって。陽」首を傾げて彼女は言った。「どこかで一緒に遊んでるのかも知れないね」

「うーん、それは、まあ」

しかしこんな状況なのだから、こども同士一緒にいる可能性はある。考え込むひとみに向かって、彼女はいつも通りの明るい口調で話した。

「お祭りの次の日で家中寝坊してね。私も楽しようと思って朝ご飯作らなかったんだけど、いつまで経っても陽が起きてこないものだから、部屋を

見に行ったら空っぽで。探しに行こうって言ってるのにうちの人、十七にもなって迷子捜しもないだろうとか言うのね。でもやっぱり心配だし。それで、嫌がる春文引き連れて、お昼過ぎからあちこち見て回ってるの。まああの子がちゃんと探してるかどうか怪しいけどね。まったく、親子共々無精で困るわ。でも、崇嗣君と一緒にいるのならいいかな。ひとみちゃん、私も一緒に探そうか、崇嗣君」

「え？　あー、んー、いえ、いいです、大丈夫」

「そう？」そして陽の母は腰に手を当てて、霧の向こうを見透かした。「春文どこ行ったかな。今度はあの子が行方不明になってたら際限がない」

「ちょっと私、神社の方を見に行ってきますね」ひとみは言った。

「じゃあ私も一緒に行くわ。陽もいるかも知れない」

そしてひとみは、陽の母と共に、診療所を通り過ぎて、神社の石段へと足を向けた。ひとみは、このさばけた性格の女性を、以前から割と好ましく思っている。

「うちの人、私が探しに行くって言ってるのに腰も上げなくって。俺は患者が来るかも知れないからここを離れられない、とか言うの。困った人」

「あははー」返事に困って、ひとみはごまかすように笑い声を出した。

「このひどい霧も、俺に訊くなよ専門外だ、って言って考えもしないのね。理系なんだから疑問にくらい思ったっていいのに。陽がこの中を彷徨ってるかも知れないんだから、こう、案じるのが親ってものでしょう？　うちの陽ってほら、小さい頃から変にぼうっとしてるというか、親でもよく分からないところがあったから。寮生活で精神不安定になって、夢遊病でも発症してたらどうするの、なんて私も言い返して。うち帰ったらまずは、夫に説教ねー」

家に帰ったらもっと面倒なことが待っている、とはひとみも言えなかった。

陽の母も饒舌だが、町会長のような身勝手なものではなく、会話で相手を楽しませるのが目的のようだった。聞いていても不快にならない。むしろ話している限りでは、彼女の方が夫よりも頭がよいように感じられた。

その時ひとみは、視界の隅で何かが動いたように感じ、そちらを見やった。

霧の向こうにあったのは、齋夜の家だった。齋夜の家は、診療所から神社へ向かう道の途中、少し奥まった場所にある、かなり古い平屋建てだった。その玄関が、ちょうどその時開いたのだ。戸の前に誰かいる。ひとみはじっと目を凝らした。

――崇嗣だ。

崇嗣が、齋夜の家へと入っていく。さらによく見れば、家の中には齋夜だけでなく、何故か陽と弥生もいた。崇嗣はよろよろと中に入ると、腰を抜かしたように玄関先に座り込んだ。そして音を立てて、玄関の戸は閉まった。

何か喋っていたようだったが、それは聞こえなかった。

「なあに、あれ」陽の母が不思議がる。「うちの子、いたよね」

「はい」考えながらひとみは応えた。

「ゆうちゃんに、津久見（つくみ）さんとこの、弥生ちゃんも。それに、崇嗣君でしょう。何だろう、みんなして」陽の母は冗談めかして考え込む素振りを見せる。「うーん、お泊まり、とか」

「えー、もうみんな高校生ですよ」ひとみは苦笑した。

「でもみんな揃うの久しぶりだしね。懐かしいでしょう。幼なじみ同士集まって。ふぅん、そうかぁ。へぇ」

彼女は妙な感嘆の声を出し、そして微笑んだ。

「いいんじゃない？　心配することないでしょう。いい気分転換になるんじゃないかな」

「はあ」

「まあうちの子はいいとして。ゆうちゃんも、あれでしっかりするところはしっかりしてるから。でも問題は、津久見さんがねえ、大事な一人娘だから」

そして陽の母は笑った。

「崇嗣君が変な気を起こしたりしないかな。なぁんてね」

「ああ、それなら大丈夫だと思います」そう言って、ひとみは薄くため息をついた。「今ちょっと彼、その、弱ってるんで」

「ん？　何かあったの？」不思議そうに彼女は首を傾げた。

「まあ、ちょっと」

ひとみは曖昧にはぐらかした。
そうして喋りながら歩いていたら、用もないのにひとみもつい、診療所前まで戻ってきてしまった。あの女を連れ帰らなくてよいだろうか、と一瞬迷うが、しかしまあ、自分には関係ない。崇嗣の居場所も分かったことだし、もういいだろう。後は野となれ、とひとみは忘れることにした。それに、
――少し、疲れた。
そのままひとみは陽の母と別れようとしたが、その時またしても町の方角、霧の中から、人が歩いて来るのが見えた。
霧に浮かび上がったのは、意外にも弥生の両親だった。あ、どうもと言って、綺麗な白髪をした弥生の父親が頭を下げた。彼は珍しく、洒落っ気のない簡素な服装をしていた。
すると、ひどく心配そうな表情をした弥生の母が、すがるような口調で尋ねてきた。
「すいません珠川先生、うちの子、弥生見かけなかったでしょうか。ちょっと目を離した隙に、どこかへ行ってしまったみたいで」
「え？　さっきゆう、あいえ、鳴橋さんのお宅にいましたよ」
「あ。そうですか。よかった」弥生の母は安堵のため息をついた。「それならそうと言って出てくればいいのに」
「書き置きとか、なかったんですか？」陽の母が尋ねる。
「いやそれが、これなんですが」
弥生の父は、ズボンのポケットから小さな紙切れを取り出した。ひとみは覗き込む。
そのメモ用紙には、何かが書いてあった。文字のようだった。そしてひとみは目を凝らす。
何かが書いてあることは分かるのだが。
何と書いてあるのかは、分からなかった。
「何ですか、これ」ひとみは顔を上げた。
「あの子の机の上に置いてあったんです」弥生の母は悲しげな表情を浮かべる。「訳が分からないでしょう？　もう私その、あの子がどうかしてしまったんじゃないかと心配で」

「うーん、でも、さっき見た限りでは元気そうでしたけどね」
ひとみは二人を少しでも元気づけようとして、笑顔でそう言った。しかし内心は、別のことに囚われ始めていた。
――何が起きているんだ？
「そうですか？　とにかく、一言言ってやらないと」
そう言って、彼女は齋夜の家へ向かおうとした。しかし弥生の父は、すぐ妻の腕を取って止めた。
「いや、放っておいてあげなさい。友達と遊ぶのだろう」言い返そうとする妻を、彼は宥めた。「あまり僕らが構い過ぎるのも、よくないよ。先生、他に誰かいましたか」
「ええと、陽君と、崇嗣君と。大集合でしたね」
「なら、大丈夫だろう。あの子だって、自分で判断くらい出来るから。今のうちに、友達と楽しく遊んでおいた方がいい」
それを聞くと急に、弥生の母は口をつぐんだ。弥生の父は、向き直ってひとみたちに言う。
「お騒がせしました。私どもはこれで帰りますが、もし何かあったらその時は」
よろしくお願いします、と繰り返し言いながら、夫婦は霧の中へと去っていった。
「じゃあ、私も。ひとみちゃん、またね」
そう言って、陽の母も、診療所のドアを開ける。
ひとみはその瞬間考え直し、陽の母の背中に向かって声を掛けた。
「あの、私もやっぱりちょっと」
まだちょっとお話があるんです、とひとみは言った。
このままにしておけば、おそらく崇嗣の家の人々は混乱した挙げ句、総出で齋夜の家まで彼を連れ戻しに来るだろう。すっかり気の抜けてしまった神主、とにかく当たり障りなく済まそうとするその妻、そして勝手で乱暴な崇嗣の父親に任せておいては何が起こることか。自分が話して説得しなければならない。まだ何が起きているかはよく分からないが、少なくとも今はあの子は、みんなと一緒にしておくべきだ。そう考えた。
――今のうちに、楽しく遊んでおいた方がいい。

弥生の父の言葉が、ひとみの中で繰り返される。
二人は、診療所の中に入った。
鐘が鳴り、ドアが閉まる。

2.

ぼくが結局何も買わずに買い物から帰ってきて居間に戻ると、驚いたことに暗い畳敷きの部屋には、弥生ちゃんが座っていた。小さく正座して、何も言わずに笑顔を浮かべている。
「来たんだ」ぼくは言った。
「来ました」弥生ちゃんは笑った。
「齋夜が出てってすぐだった」
廊下から、陽の声が聞こえた。
その後すぐに居間に入ってくると、陽も腰を下ろした。ぼくも座る。三人、お互いに顔を見合う。
誰も喋らない。
もう分かり切っているから、あえて言うことも、何もなかった。
みんな、逃げ出してきたのだ。
「うーん、この三人じゃあな」陽が軽く吹き出した。「会話もないな」
「崇嗣君でも来ればいいんだけど」弥生ちゃんが言う。
「それはそれで、面倒な気がする」陽はずいぶんなことを小声で漏らした。
そうしてまたしばらく、沈黙が続いた。
「で、どうする?」
陽が、誰へともなく訊いた。
誰も答えない。
「陽は?」ぼくは尋ねた。
「俺は、別に」やる気のない言葉が返ってきた。「特に考えてない」
「私も」弥生ちゃんが遠慮がちに言う。「迷惑じゃなければ、ここにいようと思って」
陽はいつもこうだ。一見しっかりしているように見えるけれど、実のところ、その場その場で切り抜けているだけなのだ。頭がいいから行き当た

りばったりのように見えないだけだ。もしかするとあまり、生きることに関心がないのかも知れない。
　ぼくは、どうだろう。
「齋夜、おばあちゃんの具合は？」ふいに、陽が口を開いた。
「え、ええと、うん。昨日から、寝たまま起きない」ぼくは少し気が沈む。
「大丈夫、かな」
「うん、大丈夫だと思う」陽は淡々と応じた。
「そう」
　少し安心する。ひょっとすると慰めてくれているのかも知れないけれど、陽の表情からは、何も窺えなかった。そうしながら何となく陽の顔から徐々に視線を降ろしていって、ふと、ぼくは気がついた。そろそろと手を伸ばして、陽の服に付いているその「何か」を指でつまんだ。
「え、なに？」
　陽の妙に動揺した声が、少し面白かった。ぼくは、つまんだものを光にかざして見る。
「動物の、毛？」短くて、茶色い毛だった。「ねこ？　陽、どこ行ってたの？」
「ああ、うん、ちょっと」今度は、陽がはぐらかした。
　毛を眺めて、ぼくは考えた。
　陽は目をそらす。弥生ちゃんは、うつむいたまま何も話さない。
　静かだった。
　突然、がしゃん、とぶつかるような音と、それから玄関の戸が開く音が聞こえた。
　ぼくらが玄関へ走ると、そこでは誰かがくずおれるようにして、土間に座り込むところだった。
　崇嗣だ。
「崇嗣。どうしたのその怪我」
　ぼくがそう言っても、崇嗣はべったりと座ったまま動かない。息は上がって、苦しそうだった。崇嗣のこんな姿は、一度も見たことがなかった。そっと顔をのぞき込むと、崇嗣の表情が窺えた。
　恨みのこもった、黒い眼をしていた。

しかしそれより、顔中に付いた擦り傷、切り傷や痣、赤い腫れの方がひどかった。おずおずと崇嗣の後ろに回って、弥生ちゃんが戸を閉める。磨りガラス越しの薄い光だけで、玄関は冷たく暗かった。

崇嗣はふいに、息をついて立ち上がった。何も言わないまま、靴を脱ぎ捨て勝手に上がり込み、家の奥へと進んでいく。ぼくらは、その様子をただ呆然と見守るだけだった。

やがて客間に入ると、崇嗣はふすまを閉めた。

また、静かになった。

「放っておこう」陽が言った。

そして、四時を過ぎた。話題もなくなって、居間に集まったぼくたちは無言のまま、何もしていなかった。

観るべきテレビもなく、読むべき本もなく、するべきこともなく、何かを求めてくる人もいない。ぼくは、二人を見る。陽はあぐらをかき、弥生ちゃんは膝を抱えて、中空を見つめていた。二人とも、不思議なほど安らかな無表情を浮かべていた。この静けさの中、二人は何を考えているだろう。

そしてぼくは、何を考えるべきだろう。

五時になった。ぼくは夕食の支度をしに立つ。崇嗣は、まだ籠もったきりだった。

エプロンを着け、台所で冷蔵庫の中身を眺め、一体何を作ったものかと悩んだ。予定外の四人分を作らないといけない。まあ、多少手を抜いても文句は言わせないつもりだ。

お米をとぎながらまだぼくが料理を迷っていると、音を立てて台所のドアが開いた。そちらを見ると、弥生ちゃんと陽が入ってくるところだった。二人とも、なんだかうずうずしたような微妙な表情で、ぼくを黙って見ている。ぼくは訊いた。

「どしたの？」

「何か、手伝うことある？」弥生ちゃんが、囁くように尋ねた。
ぼくはなんだか面白くなって、二人の顔を見た。
「陽も？」
「うん」照れくさそうに陽は頷く。
そして今度は、ぼくは嬉しくなった。

天気が悪いせいで、夏だというのにもう窓の外は暗く、薄紫色に変わり始めている。
みんなで料理をしていると、突然玄関の開く音が聞こえた。ぼくはつい怯えて、びくりと反応してしまう。陽はドアを開けて顔を出し、玄関を見ると、おう、とだけ言った。
誰、とぼくが訊いても、かぼちゃとの格闘に戻った陽は、あごでドアを指すばかりだった。鱗を取る途中のアジを置いて、ざっと手を洗うと、ぼくは廊下に出て玄関を見た。
「よっ」
そう言ってやって来たのは、健太だった。
何の遠慮もなく勝手に上がり込むと、健太はこちらに向かってすたすたと歩いてくる。何だか気が抜けた。
そうして台所をのぞき込んできた健太は、変なリズムに乗せてこう言った。
「なーにしてーんの」
「晩飯作ってん、の」
陽は淡々と答えると同時に、包丁を握る両手へ力を込め、かぼちゃをどすんと真っ二つにした。危ない。
調子よく健太は続ける。
「おほー、美味そう。俺にもちょーだい」
「はぁ？」
ぼくが遠慮なく無情な反応を返してやると、健太は歯を見せてへらへらと笑った。
「うおう出た、齋夜の胸に突き刺さるそのリアクション。たまんねぇ」そ

れから、健太は宣言した。「じゃ、俺は居間で待つわ」
「手伝わない奴に、食わせる飯はない」再度の切断に取りかかりながら、陽は言った。
「俺さ、寮でも毎日食堂で食ってるから。手伝ってもいいけど危険だよ。大惨事」
他人事のように健太はのたまう。
「じゃあいい」
ぼくがそう言うと、ぴったり同時に陽が同じことを言った。驚いて顔を向けると、陽と眼が合った。
弥生ちゃんがくすくす笑った。

あれこれ喋りながら作っていたので、夕飯が完成したのは結局七時過ぎだった。そしてその間、健太は本当に居間でごろごろしながら、何もせずに待っているだけだった。ひどい話だ。呆れたので、ぼくは健太に、無理矢理食器やおかず運びを手伝わせた。
ぼくがかぼちゃの煮付けを鍋ごと運びながら廊下を歩いていると、客間のふすまがすとんと開いて、中から寝起きみたいな顔をした崇嗣が出てきた。寝ていたのかも知れない。ぼくが、ご飯出来たよ、と伝えると、うん、ともごもご言って、足を引きずりながら居間まで大人しくついてきた。
小さなちゃぶ台を、ぼくらは五人で囲む。机の上には五人分のご飯、味噌汁と二尾の焼き魚、煮付けの鍋が所狭しと並んで、湯気がもうもうと上がっていた。足りない三人分の食器は、棚の奥の方から、おじいちゃんと、お父さんとお母さんのものを出してきた。
「後で消毒するぞ」
陽が崇嗣に言った。顔のあちこちについた傷のことのようだ。やっぱり崇嗣は元気なく、うん、と頷いた。それから、小声でこう続けた。
「俺、魚嫌い」
「島のこどもとは思えねーな」健太が鼻で笑った。「それじゃあ、俺がいただこう」
「みんなのだよ」ぼくはすぐにつっこむ。

「俺は一匹まるまる食わないと保たないんだって」健太が熱弁する。
「肉がない」崇嗣がぶつくさ不平を漏らす。
「文句言う奴は食うな」変に凄味のある声で陽が言った。
するとその時脈絡なしにいきなり、健太が手を合わせてこう言った。
「いたーだきーますっ」
小学校の頃やっていた、「手を合わせていただきます」だった。ぼくらは顔を見合わせたが、こうなっては仕方がない。みんな、半ば条件反射のように手を合わせた。
そして一緒に言った。
「いたーだきーますっ」
それから、笑った。

3.

台所で食器を洗いながら、ひとみはまた重いため息をついた。
――これで、よかったのだろうか。

あの後ひとみは診療所で、ベッドに眠る幸奈を見られて慌てて言い訳をする若先生をよそに、崇嗣の家で、そしてここで何があったのかを、陽の母親に向かって一から説明した。額を押さえ苦い顔をしていた彼女だったが、最後に真剣な面持ちで、こう言った。
「こどもたち、どうかしたのかな。崇嗣君も弥生ちゃんも、そんな子じゃないと思ってたんだけど。今朝も、陽を捜しに行く前に、この人と、春文が言ってたんだけど。陽が昨日の晩おかしかったって。なんだか、何話しかけても聞いてないみたいに上の空だったとか、かと思ったら口をぱくぱくさせて、怒鳴り散らすのに声は出てなかったとか。私は、酔ってたからでしょって相手にしなかったんだけど」
これを聞いて、ひとみはああ、と目を瞑った。
祭り以来ずっと感じ続けていた嫌な予感、まさかと思っていた推測が、ようやく確かな像を結び、今何が起きているのか、ひとみはすべて自然に飲み込んだ。到底信じられることではなかったがど、そう考えないことに

は何も説明が付かない。それに、外を覆い尽くす一面の霧が、何よりもこの異変を納得させてくれた。

――おとなとこどもの間で、声が聞こえなくなっている。

急いで彼女に感謝すると、ひとみはふらつく幸奈をつれて、診療所を出た。濃霧の中、足早に崇嗣の家へと向かう。家の中では、残った三人がまだ喧嘩を続けていた。苛立たしさを堪えたひとみは、彼らを半ば煙に巻くようにして説得し、強引に崇嗣の外泊許可を取り付けた。そうして幸奈をそこに残すと、疲れ果てたひとみは、何とかかんとか実家まで戻った。

ただいま、と舌足らずに言って玄関を開けると、そこには、憤怒した父が待っていた。

「どこほっつき歩いとるんだ、嫁入り前の娘が」

「いいじゃない。島の中なんだし」

「口答えするな、ど阿呆」

心身くたびれていたため、普段なら聞き流せる父の暴言に、つい言い返してしまう。それが頭に来たらしい父は、右手をさっと振り上げた。ひとみは目を瞑り、身構えて手で顔をかばう。ひとみは幼い頃から、こうしてよく父親に殴られてきた。

ところが。

来るはずの一撃は、いつまで待っても来なかった。

ひとみがそっと目を開くと、行き場を失った平手を、父がみっともなく下げるところだった。

ふん、と大きく鼻息を漏らし、ひとみの父は足音荒く、居間へと戻っていった。

ひとみは、気が抜けてしまった。

気が抜けたまま親と一緒に夕食をとり、そして今、気が抜けたままひとみは、台所で洗い物をしている。父は、隣の部屋で不機嫌な態度を貫きながら茶を飲んでいる。母は、何も言わずに洗濯物をたたんでいる。万事は平穏だった。

平穏なまま、ひとみは風呂に入り、髪を乾かし、化粧水を塗り、その間もずっとぼやぼやと、考え事を続けた。自分が何について考えているのか、よく分からなかった。脱衣場の鏡に映る自分の顔を、目を、ひとみは眺め

た。それから服を着て、部屋に戻った。
曖昧な気持ちが、胸の中に漂っていた。
ひとみの部屋は、高校に行って家を出た後も、ずっと手を触れずそのままにしてある。誰も片付けていない部屋は、昔と変わらず散らかりっぱなしだった。ひとみは、勉強机の椅子に腰掛けた。長らく使っていない椅子は、うめくように軋んだ。
ひとみは、本を読むのが好きだった。ごくごく稀に親が本土へ行く用があったら、なんでもいいから一冊、本を頼んだ。そうして買ってもらった本が、勉強机の脇にある本棚にたくさん並んでいる。同じ本を繰り返し、ぼろぼろになるまで読んだ。もっと読みたくなって、学校の図書室の本もすべて読み尽くした。どの本も、大好きだった。
ひとみは本棚から一冊手に取る。一番好きだった児童文学だ。粘土細工だったネズミが動き出していろんな冒険をする話だった、と思う。好きで好きで、こどもの頃は一から十まで何もかも憶えていた。母親に向かって、こんな話でこうなるのだ、ということを、母が聞いていなくとも気にせず一生懸命話していた。表紙を撫でながら、ひとみは考える。
――どんなお話だったかな。
作者の名前は知っている。大学で聞いた憶えがある。たぶんドイツ系だろう。他の著作は何があったろうか。確か、児童文学の大きな賞も取っていた。裏表紙を見て、思いの外値が張ることに驚く。本を読む暇も、なくなって久しい。そして思う。
あの記憶は、どこへ行ったのだろう。
ひとみはまた深くため息をついて、本を戻した。
もう寝ることにして、ひとみは布団を敷く。埃の溜まったこの部屋も、彼が来る前に何とかしないといけない。しかしもう、何をやる気も起こらなかった。紐を引き蛍光灯を消し、布団へ入る。
なかなか寝付けず、布団の中でひとみは考え事を続けた。明日はどうしようか。こどもたちの本当の窮地を知る人間は、自分一人しかいない。とりあえず、幼なじみ二人、春文と脩一に相談しようか。けれどあの二人に、話が通じるだろうか。しばらく見ないうちにどちらもすっかりひねて、意固地な性格になってしまった。やつれて、まるで中年だ。二人とも少し前

まで自分ともいい友達だったのに。春文も、前まではまだかわいいものだったのが傲慢に成り下がり、脩一に至っては、昨日会ったらまるで枯れ木のように寂しげな人間になっていた。

それともそれは、自分のせいだろうか。自分が彼のことを振ったのが悪かったのか。そもそもなんで振ったのだったか。思い出せない。小さい頃からずっと仲もよかったのに。会う度気まずくてつらい。目を合わせることが出来ない。なんでこんなことになってしまったのだろう。

いや、そんなことは今はいい。他に相談するには、誰が適当だろう。そうだ、水垣先生だ。先生ならきっと分かってくれる。そうしてまた、自分が小学生だった頃の記憶が蘇った。あの頃と同じように、今度もきっとうまく、他の物わかりの悪いおとなたちに話をつけてくれる。そしてこどもたちを、助けてくれる。そうしよう。ひとみはそう思った。

こどもたちは今、どんなに不安だろう。普段は強がりばかり口にするあの子たちが、皆怯えるようにして、齋夜の家に集まっている。もしかすると、健太も既にあの家へ行っているかも知れない。かわいそうに。きっと怖がっているのだろう。

助けを求めているこどもたちを、何とかしてやらなければならない。

遅かったかも知れないが、私は何とかして、あの子たちを、

私は、

もう私は、こどもじゃないんだ。

ひとみは泣いた。

4.

馬鹿な話をしながら和気あいあいと夕飯を食べ終えた後も、ぼくらはしばらく、居間で昔の思い出話をしていた。昔と言ってもほんの数年前のことだけれど、こうしてきちんと話す機会は初めてだった。楽しかった。

ふと、騒ぎすぎたかと思って、ぼくはおばあちゃんの眠る隣の部屋を見遣った。気付けば昨日、祭りに出かけてから丸一日、おばあちゃんは眠り

続けてまだ起きなかった。
喋っているみんなの輪の中から、ぼくはそっと抜け出した。
「どうした？」陽が気付いて話しかけてくる。
「ちょっと」
上の空で返事をして、ぼくは隣の間へ続くふすまを細く開けた。
おばあちゃんは真っ暗な部屋の中、まったく姿勢を変えずに寝ていた。胸の辺りの布団がかすかに上下しているから、妙な心配はしなくても良さそうだった。
いつの間にか陽が、ぼくの側（そば）に寄り添うようにして部屋をのぞいていた。
「おばあさん、大丈夫か」
「うん」
ぼくはそう言うと、すぐに陽を遮り、手早くふすまを閉めた。陽が少し目を丸くしてぼくを見る。でも結局、何も訊かずに陽は輪の中へ戻っていった。
今は忘れていたい、と思った。
「おばあさん起こしちゃった？」
弥生ちゃんが心配そうに小声で尋ねてきたので、ぼくは笑顔で返す。
「ううん、大丈夫」
「どーせ聞こえねーんだから、いいじゃん別にさ」
調子よく崇嗣が口を挟む。陽が睨み付けるけれど、まったく意に介さなかった。あれだけ落ち込んでいたくせに、ご飯を食べていたらあっさり機嫌をよくしたのだ。現金なやつだと思う。まだ顔に赤い腫れは残っているけれど、それももうだいぶ小さくなった。
「ああそうだ、消毒だった。齋夜、薬箱どこにある？」
陽が思い出したようにぼくに向かって言うと、崇嗣が急にわたわたと慌てだした。
「え、いやいいってそんな、悪いし、な。だいじょぶって。唾つけときゃ治る治る」
「顔に唾つけるのか。汚い奴だな」
目を細めて、陽は崇嗣の顔の傷を眺めた。ぼくは陽に、棚から引っ張り出してきた緑色の薬箱を手渡した。今にも逃げようとする崇嗣に、陽はさ

らりと言い放つ。
「消毒するのは風呂の後だ。逃げても無駄だからな」
それを聞いてぼくが立ち上がろうとすると、先に弥生ちゃんが言った。
「私、お湯入れてくるね」
そのまま行ってしまう。弥生ちゃんの後ろ姿を見送ってから、ぼくは言った。
「じゃあぼくらは食器の片付け。健太、行こう」
「なんで俺」
恐ろしく不服そうに健太は口をとがらせた。すると陽が、薬箱の中から使えるものを取り出しながら命じた。
「作りもしないでさんざ食ったんだからなんか働け」
健太はちぇーと分かりやすい声を出して、皿や茶碗を適当に重ね抱えると、台所へ歩いていった。ぼくも、残りを持って続いた。
流しの脇に食器を置いて、洗い物を始める。健太は尋ねてきた。
「齋夜、洗剤は？」
「油もの以外には使わないよ。知らないの？」
「やんねーからなあ」健太は遠い目をした。
「自炊くらいすればいいのに。練習忙しいのかも知れないけど」
ぼくが次の皿を手に取って言うと、健太はぼやぼやとごまかすように言った。
「んー、ああ、まあなあ、うん」
なんだろう、と思って健太の顔を見たけれど、健太はそれ以上言わなかった。
洗い物が終わると、弥生ちゃんがお風呂が沸いたと知らせてくれたので、ぼくらは順番に入ることになった。すると陽が崇嗣に向かって、お前が最初に入れ、と言った。
「なんで。いいって俺は、後の方でさ、ほんとに」
「お前がさっさと入ったほうが怪我の手当とか、俺が楽なんだよ」陽が口を曲げて言った。「それとも、先だと何か困るか」
「いやー別にぃ」
露骨に崇嗣は空とぼける。そして健太の方を向いてなあ、と意味ありげ

に言った。
「ん？　ああ、まあ」
違うことを考えていたのか、健太はいつもなら即座に崇嗣の意を汲んで一緒にふざけるところを、ぼやけた返事をした。
ここでふと、ぼくは気付いた。
「のぞく気？」
ぼくが言った途端、陽は眉間の皺を深め、弥生ちゃんは目を丸くし、健太はそれがあったかとようやく気づき、そして崇嗣は、必死で否定し始めた。
「ちょっと、いや、まさかそんなのぞくなんて、俺みたいな紳士が。あははははははは」
すると途端に健太も便乗したくなったのか、崇嗣を援護し始めた。
「いや、そうだって。こんなせっぱ詰まった時にそんなこと、いくら崇嗣でもしないしない。修学旅行じゃあるまいし」
「修学旅行ではのぞいたの？」
ぼくは尋ねた。すると崇嗣、健太に加えて陽までが口をつぐんだ。目を向けると、弥生ちゃんが無理をして顔に微笑を浮かべていた。引いている。
ぼくはちょうど体調を崩していた時期だったので、中学校の修学旅行には行けなかった。だから向こうで何があったのか、何も知らない。ひょっとしたら何かしたのかも知れない。陽も二人と同室だったから、下手なことを言えないのだろう。
ふと見れば、弥生ちゃんの顔が引きつっていた。考えてみれば今の状況では、最悪お風呂場の戸から直接侵入されたとしたって、どこかに助けを求めることも出来ないのだ。
憂鬱そうな顔をした陽が、重々しく口を開いた。
「まず崇嗣が入る。次に健太が入っているうちに、俺が崇嗣の怪我の処置をして、それから俺が入る。後は弥生ちゃん、最後に齋夜な。その間、崇嗣と健太は俺が見張る。以上。これでいいな」
へーいとお調子者の男二人は気のない返事をした。陽は深々と溜息をつく。
「なんで風呂入るだけでこんな軍事作戦みたいな指示出さなきゃならない

んだよ」
「着替えはどうする？」ぼくは話題を変えた。
「俺らはパンツ一丁でもいいけど」健太が当たり前のように言う。
「ぼくが厭だ」ぼくは睨み付けた。
「パジャマか。弥生ちゃんは齋夜のでいいけど、俺らは」
そこで陽は口ごもり、ぼくの方を見た。言いたいことは分かる。迷ったけれど、こういうときだから仕方がない。ぼくは言った。
「お父さんのでよければあるよ。出しとく」
こうしてお風呂の問題が全部解決された。崇嗣と健太が弥生ちゃんに、全部冗談だから、気にしないでね、ほんとにね、と一生懸命弁解している。弥生ちゃんは、うん分かってるよ、と言いながら、引きつった笑顔のままだった。ぼくはため息をついた。なんだかいちいち疲れる。
でも、どこか楽しかった。

そして予定通り、ぼくが最後にお風呂に入った。お湯はすっかりぬるくなっていたけれど、仕方がない。でも、そんなことすら久しぶりだった。いつもはぼくとおばあちゃんしか入る人はいないし、おばあちゃんがお風呂に入っている間は、何か起きはしないかと神経が休まらない。自分で入っていても、外でおばあちゃんが何かしでかすかも知れないと不安で、だからゆっくりお湯につかることのすら、ここ最近なかった。
お風呂場に漂う湯気を見て、少し考える。
家の外には、きっとまだ終わりの見えない深い霧が立ちこめているのだろう。そしてそれ以上に、おとなたちとの無音の壁はなくならないままなのだろう。それは確かに困ったことなのだろうし、だからこそみんなも、ここへ集まっている。真剣に考えて、これからどうするかを話し合うべきなのだろうと思う。早ければ明日には、親たちもここへ来て、みんなを連れ帰ってしまうかもしれない。そうなったらぼくらには、もうどうすることも出来ない。早く考えたほうがいい。お風呂から上がったら、試しに話してみようか。
けれど。
ぼくは躊躇する。

天井から水滴が垂れる。
まだ、大丈夫だろう。明日の朝もある。落ち着いて話し合っても、分からないものは分からない。みんなだって、何も言い出さないということは気が進まないのだろう。自然と話題になるまで待てばいい。何かいいアイディアが浮かんだら、きっと誰か話し出す。それを待とう。
いや。
もっと、正直に考える。

おとなとこどもの間で声が聞こえなくなっても、
そんなこと、ぼくは、どうだっていいんだ。
だって今、
ぼくは、

お湯を手のひらで少しかき分けて、ぼくは自分の無秩序な考えを深く沈めた。

お風呂から出ると、今度は寝床の話だった。まだ九時前だけれど、することもないし、みんな疲れているのでさっさと寝ることにしたのだ。五人みんなで、ちゃぶ台を囲んで話し合う。さっぱりとした湯上がり姿はお互いに新鮮で、何となくどきどきする。
崇嗣が真顔で提案した。
「みんなで一緒に寝ようじゃないか」
「まだ懲りてないのか」
陽が辛辣に切り捨てる。弥生ちゃんは櫛で長い髪をといていたけれど、崇嗣の言葉を耳にした途端、びくんと動揺したのが分かった。
「ぼくは自分の部屋で寝るけど」
ぼくがやるせなく言うと、崇嗣はあたかも正論を吐くように、手振りを交えつつ熱心に主張した。
「齋夜、そういうことじゃよくない。やっぱこう、友達っつうのは常に近くにあって、通じ合ってこそのもので、だからこそ素晴らしいんじゃない

かな」
「何を言ってるんだ」陽はあくびした。
「でも、バラバラに寝る方が怖いんじゃねーかな」
健太が、柄にもなく低い声でぼそっと呟く。それを聞いて、全員が厭な顔をした。特に弥生ちゃんの眉が、どんどん八の字に下がっていく。
「い、いや違うって、一般論、一般論」
慌てて健太は、手を振り振り言いつくろった。
「怖いっていうのは、だから変な意味じゃなくて、その、ほら」
「まあでも、実際そうかも知れないな」陽が話す。「変な意味じゃなく。こんなときだから何かあるかも知れないし、もしかしたら外から誰か来るかも知れないし。そういうとき、誰かが気付いてやれないとまずい」
変な意味じゃないと口では言いながらも、陽と崇嗣はお互い牽制しあっている。冗談でやっているのだと信じたい。でも確かに、一カ所に固まっていた方が色々な意味でいいだろう。
こうしてぼくらは、居間で五人一緒に寝ることに決めた。
ふすまを取り外し、ちゃぶ台をどけ、押し入れの奥から引っ張り出した布団を一面に敷き並べる。そしてみんなが顔を突き合わせるように、枕を全部内側に置いた。
自分の布団の上であぐらを掻いた崇嗣が、壁に掛かった古い時計を見てのけぞった。
「九時ちょっと過ぎぃ？　早」
「いつも何時に寝てるの」
ぼくが尋ねると、考え考え崇嗣は答えた。
「二時？　か三時。もっとかな。ほら色々あるじゃん、ゲームとか深夜番組とかさ。で、気付いたらそんな時間」
「起きれるの？」
「毎日遅刻」
崇嗣は嬉しそうに笑い、傷口が開いたのか痛がりだした。目に涙を浮かべながらも、軽口を叩き続ける。
「でも、あれだろ？　陽なんか、毎日勉強忙しいからそんなもんだろ」
「十二時には寝るよ。そんな時間まで起きてたら次の日頭働かないだろ」

「授業中寝てりゃいいんだって。なぁ陽さ、やっぱ名門校だと授業中でもみんな寝ずに勉強してるわけ？」
ちょっと迷って陽は応えた。
「みんな寝てる。学校の授業は進度が遅いから聞かないんだよ。学校で寝て、放課後予備校で集中するんだってさ」それから言い添えた。「俺は起きてるけど」
「はー。大変だなあ。うちなんか大した学校じゃねーからさあ、隠れてマンガ読んでる奴とか、ゲームしてる奴とか結構いてさー。授業中うっかり音出しちゃって没収されたり」
「それお前だろう」陽が遠慮なく言う。
「健太はー？」聞かなかった振りをして、崇嗣は話を変えた。
「毎日十時就寝、六時起床」
健太は、丹念に枕を撫でて整えている。そして顔を上げて、にかっと歯を見せる。
「快適快眠」
「じーさんじゃん」
崇嗣は布団をばんばん叩いて笑った。
すると、しばらく黙って話を聞いていた弥生ちゃんが口を開いた。
「この間、陽君模試の冊子に載ってたよね」
モシのサッシってなんだ、とぼくはとっさに分からず首を傾げたけれど、健太と崇嗣は裏返った声を上げた。崇嗣が大袈裟に騒ぐ。
「マジで？　やばいなそれ。何位くらい？」
「そこまでは憶えてないけど」弥生ちゃんは苦笑する。「ぱらぱらって見て、あ、陽君載ってるって思って」
「全国ランクだろ、なあ陽、どうだったんだ？」
健太が興味津々に尋ねる。けれど陽は気のない様子で目をそらし、はぐらかすように何ごとかぶつぶつと言った挙げ句、つまらなそうに応えた。
「忘れた」
「なんだよ、いいじゃん教えろよ」
崇嗣が陽にすり寄りふざけていやらしく訊く。ここまで話が進んでようやくぼくは、模擬試験の結果がよくて陽の名前が何かに載ったのだ、と理

解した。
　また疎外感を感じた。
「齋夜もさあ」
　急に話が廻ってきてぼくは我に返る。
　陽にくっついていた崇嗣が、ぼくの方を向いてこう言った。
「頭いいんだから、そろそろ模試とか受けてみたら？　あるんだろ？　高校行ってなくても大学受けれる制度かなんかさ」
「そうそう、高校行ってなくて厳しいかもしんないけど。前に問題集とか買ってきたあれ、やってるんじゃないの」健太も言う。
「んー、うん、まあ」
　ぼくは下を向いて、いい加減なごまかしの言葉を口にしながらパジャマの裾をいじくった。それくらいのことは、ぼくだってずっと以前から考えてはいた。行けるものならもちろん行きたい。でも、ぼくは、
　ぼくは、この島を離れるわけには、
「さっさと寝よう」陽が少し大きな声で言った。「電気消すぞ」
　陽は手を伸ばして、天井から下がるひもを引いた。橙色の豆電球だけがぽつんと光る中、ぼくらはもぞもぞと布団の中に入る。湧き上がった不安な気持ちも、ぼくはどこかに押し込めた。
　ひんやりとした布団からは、押し入れのにおいがした。
　最初はみんな黙っていた。けれど時間が早すぎて、やっぱりなかなか眠れない。やがてうつぶせになって枕に両腕を載せながら、ぼくらは顔を突き合わせた。まだ誰も喋らない。
　この雰囲気はまるで、
「なんか、修学旅行みたいだ」
　崇嗣が小声で言った。電気を消すと、何故か意味もなく声を潜めたくなるものだ。そして、どこかわくわくする。暗い中でも、みんながにやにやしているのが分かった。
「こんな楽しくやってる場合じゃないんだけどな」
　陽が愉快そうに呟いた。外がどうなっているかなんて、もうぼくはほとんど忘れかけていた。
「まあ、いいんじゃね？　暗いことばっか考えてても仕方ないって」

余裕を見せようとする健太のそんな言葉を受けて、崇嗣が嬉しそうに切り出した。
「で。修学旅行といえばさー、やっぱほら、怖い話だよな」
「今の状況で怖い話って言われても」
ぼくは気が乗らなかった。陽も皮肉っぽく笑い声を洩らす。すると、健太が偉そうに言った。
「俺は滅多なことじゃ怖がんねえからな」
「へえ。修学旅行の時、布団に潜り込んでわあわあ言ってたのは誰だったかな」
陽にそう言われて、健太が急に情けなくなった。
「それはさーあ、触れちゃいけないっつーかさーあ」
「健太君恐がりなの？」
素朴に尋ねる弥生ちゃんに向かって、軽薄な喋り口で崇嗣が語り出す。
「それはもう有名な話で。憶えてるか？　ちっさい頃あの海岸沿いの岩場の洞窟で遊んだときなんか、やだよー奥に行くのが怖いよーお母さーんって。ねーえ」
「おいお前いい加減にしろ」
そう言うと健太はのし掛かる。痛がる崇嗣はのたうち回って喚いた。
「なんで陽と俺とでそんな違うんだよ、痛いって、顔は駄目だって」
「うるさいなあもう」溜息をついてぼくは言った。
大体、こわい話なんかろくなことにならないのだ。健太はもちろんそうだけど、崇嗣だって何だかんだ言って実は怖がりだし、弥生ちゃんも普通に怖がるし。それに、黙っているけど陽だって、あれで結構気にする方だ。なまじっか記憶力がいいから、変なことまで一人だけずっと憶えていて、後々引きずっていたりする。だから陽には、下手なことを言わない方がいい。
ひとしきり暴れ終わってから、崇嗣は再び口を開いた。
「さて、怖い話ですが」
「しつけーな、そんなもんねーよ」
健太の口調も、だいぶ荒っぽくなっている。本当に嫌なのだろう。
「いや、あるんだって、俺が話すからさ」

そう言うと、崇嗣はわざとらしく咳払いをした。
そして、話し始めた。
「婆ちゃんが近所の人から聞いた話らしいんだけど。今ってもう、この島に小さいこどもっていないじゃん。俺らから後は生まれてないから。それなのにさ」

その前置きを聞くだけで、
少し起こりかけていた楽しい気持ちが、たちまち消え失せるのが分かった。
そしてぼくはまた、自分の中に不安が降りてくるのを感じた。

すごく、すごく厭な気持ちが、
「それなのに、ここ最近、島のあちこちで小さいこどもが、ひとりで歩いているのを見た人がたくさんいるんだって」
やっぱり、あの子が、
「あちこちって言ってもまあ、森の周りだけらしいんだけど」
せっかく忘れかけていたのに、
「白い着物を着て、髪が肩に届くくらい長い、三、四歳くらいの、小さいかわいいこども。そんな子が明け方に」
白い姿が、甦る。
森の中で、祭りの中で、
どこを見ているのか、
浮かび上がるように立つあの子が、
あの子が、
そして声を失うおとなたちを見て、
ぼくは、
そう、あの子のせいで、
ぼくは、
「齋夜」
囁く陽の声が、あたたかくぼくの耳に届いた。
ぼくは、自分でも気付いていないうちに、沈み込むようにして布団の中

へと潜っていた。
息のこもる暗がりの中から、ぼくは、顔を出した。
陽は、優しく言った。
「大丈夫か」
ぼくは、何故か涙が出そうになった。
すごく、怖い。
「珍しいな。齋夜がそんなびびって」崇嗣が意外そうに言った。「どした？
そんなに怖かった？」
「見た」ぼくは思わず口にした。「見たんだ」
「何を」健太が、かすれた小さな声で問う。
「あの子を」涙が勝手に目から流れて、ぼくは唇を強く噛んだ。「祭り、神社で」
「え、ちょっとおい、なんだよー、泣くなよ齋夜ー」
困ったようなひょうきんな声で、崇嗣が何とかとりなそうとする。でもも
う、駄目だった。
もう、聞きたくない。
白い衣が目の前にちらつく。
無表情な、綺麗な顔が、
どこか遠くを見て、
そして、ぼくを見る。
ぼくは、こらえきれなくなってこう言った。

「あの子のせいだ」

みんな、黙ってしまった。
「うちのお母さんも、そんなこと言ってた」弥生ちゃんが、ためらうように口を開いた。「そういうこどもが、島のどこかにいるって」
「そういやうちのお袋も、お客さんから聞いたとか話してたな」
健太までそう言った。崇嗣は場違いなくらいにおどける。
「なんだ、みんな知ってんのか。先言ってって、そういうことはさあ。俺滑ってんじゃん」

たぶん、ぼくを笑わせようとしてのことだろう。けれどぼくは、枕から顔を上げることが出来ない。

少し震えた声で、健太が言った。

「俺が聞いたのは、神社の前の道だけだったけどな。って、この近くだよなー。島中に出てんのかな。なあ、陽は知ってたか？」

「ん？　ああ、なんか、兄貴が」面倒くさそうに陽は応じると、ぼくのことを心配して、また言ってくれた。「齋夜、ほんとに大丈夫か」

ぼくは、何とか顔を上げて笑ってみせようとしたけれど、でも無理だった。

涙は、滑るように目から流れ出た。

苦しかった。

また、部屋は静かになった。

その時、弥生ちゃんがぽつりと呟いた。

「かずちゃん。和月ちゃんって、そんな子だったね」

ああ、と言って、みんなも思い出したようだった。崇嗣が考えながら喋り始めた。

「あー、あの子なあ。すっげえちいさい頃、一緒に遊んでたよな。なんつったらいいのかな、その、すごい、美人でさ」

「あの歳で美人も何もないだろ」陽は肩を揺らして小さく言った。

「でも、綺麗だったよね」弥生ちゃんは、心から懐かしんでいるようだった。「目が大きくってね、まつげが長くて、髪の毛も、私よりずっとさらさらで、私ちょっと嫉妬した。大きくなったら、もっと綺麗になったんじゃないかな」

「弥生ちゃん仲良かったからなあ。二人ともあんまり走り回ったりしなかったし。一緒に見てるだけとか」

健太がそう言うと、弥生ちゃんはこくりと頷いて言う。

「でも、ゆうちゃんやようちゃんの方がずっと」

「ようちゃん？」

うっかり言ったことを崇嗣に混ぜ返されて、弥生ちゃんは顔を赤らめた。陽の方も苦笑している。陽は小さい頃、そう呼ばれていたのだ。頷きながら、健太が続けた。

「でもそうだよな、陽と齋夜の方が、かずちゃんとはずっと仲良かったな。ゆうちゃんとようちゃんはいつも一緒で、かずちゃんと三人で遊んでる、って、俺らよく言ってた。三人だけでどっか行くから、ズルい、仲間はずれだー、とか」
「ようちゃん、ようちゃん」崇嗣がからかう。
「うるさいな」
よそを向いて陽が言う。たぶん照れているのだ。そして、復讐するように崇嗣へ言い返した。
「そういえばお前、かずちゃんのこと好きだとか、かわいいとか、あと、かずちゃんと結婚するんだーとか言ってなかったか？」
「言ってたね」弥生ちゃんが微笑む。
「おいちょっと、それないって」
今度は崇嗣が照れて否定する。みんなが笑った。
「かずちゃんか」健太が確かめるように言う。「うん」
言葉が途切れる。
「あの子、どうしたんだっけ」ふっと息をついて、健太は言葉を継いだ。
「行方不明」珍しく、まじめな顔で崇嗣が答えた。「で、もう何年前か」
「十一年前」
そう言って、弥生ちゃんは枕をじっと見ている。ひどく悲しげな声だった。
「結局最後まで、見つからなかった」
そうしてうつむくみんなの姿を、ぼくは枕に顔をつき、何も言わずにただじっと見つめていた。涙は止まっても、暗闇の中でぼくの動揺は、いつまで経っても静まらなかった。ぼくは、何も言えない。ぼくは、みんなのように素直に悲しむことが出来ない。
ぼくは知っているからだ。

かずちゃん。
あの場所で、いつもぼくを、
待っている。

「さっき」唐突に健太が言った。「さっき齋夜、言ったよな」
ぼくは答えない。
「祭りの時、いたのか？　その、白い服の、こども。神社に」
その言葉は、ぼくをますます揺さぶる。
「それさ。その、もしかして、かずちゃん、だったか？」
崇嗣は迷いながら、そう尋ねてくる。
ぼくは、頭から被った布団を握りしめた。そうして、暗闇の中に紛れてしまいたかった。
「でも、十一年も経つから」
弥生ちゃんが、自信のない声音で呟く。すると崇嗣が、変なことを言い出した。
「俺、テレビで見たよ。親に育てられなくて、ずっと成長しないこどもって、いるんだってさ。なんかの事情で、栄養が足りなかったり、かまってもらえなかったりすると、小さい頃のままで、ずっと姿が変わらないことがあるって言ってた」
「じゃあ」
健太が確かめるように、掠れた声で囁いた。
「森の中でずっと？　今も？」

そして闇の中に囁く声は、誰の言葉なのか分からない。

「まさか」
「どうやって？」
「お祭りに、いたの？」
「どこにいるんだよ」
「だっていなくなったのは、祭りのときだったし」
「昔探したときは見つからなかったって」
「あんな森、入っていけるわけないじゃん。どうせ初めから探してないんだろ」
「だからだよ。森の中で生きて」
「有り得ないって」

「じゃああの噂は？」
「じゃなかったら幽霊とか」
「やめて」
「この島って、なんか変なんだよ」

闇の中に囁く声は、いつの言葉なのか分からない。

「あっちを探せ」
「祭りの後迷い込んだきり」
「だからその子が」
「生きている？」
「神隠しだ」
「迷い込めば最後、二度と戻ることはない」
「戻る必要はない」
「死んだ」
「ひどい霧だ」
「こんな」
「怒っている？」
「神のような」
「島は森と、川と、滝と、海が」
「白い綺麗な着物を」
「島になった」
「声が聞こえなくなった」
「言葉は奪われた」
「理由があるならそれはきっと島に」
「かずちゃんは島に」
「島になった」

「なあ、齋夜」
そして誰かが、訊いた。
「祭りの時に見たのは」

遠く木の傍らに見えたあの小さな姿は、
あの子は、

「あの子は」

「もういいよ」
そう、陽が言った。
すると、すべてが戻ってきた。
ぼくはほとんど息もせず、じっとしていた。
自分が何処(どこ)にいるのか、何時(いつ)にいるのか、分からなくなっていた。
「そんなこどもなんか、関係ないよ」いよいよはっきりした声で、陽は言った。「成長しないこどもっていうのは、滅多にある例じゃない。食べ物も何もない森の中で、生き延びられるわけがない。それに、そんなこどもがいたって、何が出来るわけじゃないだろ。どんな不思議なこどもだって、声が聞こえないようにするなんてこと出来ない。そういうのを迷信って言う」
「んな言い方しなくたっていいだろ」健太がむっとした。「じゃあ分かんのかよ。何で声が聞こえなくなったか」
「知らない」冷たく陽は言い放った。「だから。昨日も言っただろ。理由はどうだっていい。問題はどう対処するかだ」
「どうだっていいからって無視していいのかよ。どうせ分かんねえから適当言ってるだけだろ」
あまりに無下に扱われて腹を立てた健太は、そんな荒っぽい声を出した。崇嗣も続けて、不満そうに尋ねる。
「じゃあ、噂は？」
「それこそどうだっていいだろ。朝っぱら町をうろうろしてるこどもがいても、別にかまわない。どこかの家で帰省してるのを、みんなが知らないだけだ。一人が見たら、みんな見たような気になって言い出すんだよ。田舎ではよくある」
「齋夜は？　齋夜だって見たって言ってる」
「だから」少し言い淀んで、陽は応える。「見間違いだ。齋夜は、昔から

よくそういう勘違いするよ」
「おい齋夜。いいのか」健太が気色ばんだ。
「喧嘩はやめて」
ぼくは普通に頼んだつもりだったのだけど、しばらく黙っていたからか泣いていたからか、声がかすれた。そのせいでまるで強く懇願するように聞こえてしまい、健太は一度で黙ってしまった。
「まあ、こんな時だし」
陽も言いすぎたと思ったのか、少し語勢を弱めた。
「俺も何も分からないから、何ががいてもおかしくはない、とは思う。でも、これ以上不安、ていうか心配事増やしても、仕方ないだろ。かずちゃんの幽霊、か何か、そんなようなものがいて、それが何かしてたとしたって、俺らには何も出来ないし。供養でもするのか？」
陽は徐々に力を抜き、声を潜め、一言一言を選ぶように迷うように、低くゆっくりと囁いた。
「こんなことになってるんだから、何か原因はあるんだよ。たぶん。でもそれは、俺らがどうこうできるようなものじゃない。理由なんて探せばどうとでもつけられるし、それ以前にひとつとは限らないから。かずちゃんの幽霊のせいだ、で納得するんならそれでもいいけど、そればっかりに囚われて、それで行き詰まっていたらどうしようもない」
ぼくは、ただ聞いているだけだった。
「理由は何にせよ、俺らは今こういう状況にあるんだし、それを説明したところでどうにもならない。その場その場で出来るだけのことをするしかないよ。何かが起こりそうなら、それに従う。もし幽霊がいて、それが現れたなら」
そこで陽は目を落とした。
「巻き込まれて、流されてみるか」
その時。
玄関から、妙な音がした。
かしゃん、と戸を突くような、小さな音だった。
誰か来たのだろうか。今は、十時過ぎだ。
また、鳴った。

何の音もない中、遠くから鈴のようにガラスが鳴る。
まるで、呼んでいるようだった。
「なに？」弥生ちゃんが壁の向こうを見た。
開け放しにした障子の向こう、真っ暗な廊下は、何も見えないその先から、
また、鳴った。
「何、何、厭だよ」健太は足を縮めて布団の中で丸くなっている。
今度は、二度鳴った。崇嗣は何も言わず、たぶん青い顔をしている。
ぼくは顔を上げて、静かな廊下に目を向ける。
廊下には、外に向かって木枠のガラス窓がはめ込まれている。
けれどそこに透けているのは、月も何もない夜と、漂う霧だけだった。
また遠くで、かしゃん、と繰り返される。
意志の感じられないノックだった。
もう誰も、言葉を出せない。ぼくの心臓は、痛いほど脈打っている。
厭だ。
あれは、きっと、あの子だ。
あの子が、きっと、ぼくを呼んで、
「見てくる」布団を退けて、陽が立ち上がった。
「いいよ。ほっとけよ」健太が布団にくるまって囁いた。「そのうち止むよ」
しかし気にせず、陽は開いた障子に手をかける。黙ってそのまま行ってしまいそうになる。
ぼくはほとんど無意識のうちに、声をかけた。
「陽」そして立ち上がる。「だったら、ぼくも」
陽は頷いた。
「いいって。やめとけって、ほんとに」健太はしつこく食い下がる。「お前ら戻ってこなかったら、今度は俺が見に行かなきゃならなくなるだろお」
「何言ってんだよ」
陽は意に介さない。廊下に足を踏み出す。ぼくも、それに続く。
廊下は吸い込まれるような奥行きのある暗さを湛え、静まりかえっていた。

また、かしゃん、と鳴る。
ぼくらは廊下の角を折れる。そしてこの先に、玄関がある。
ふいに、陽が呟いた。
「齋夜」
「何」
「どうするんだ」
ぼくは応えない。陽も、それ以上は問わない。
やがて、玄関にぼくらは立つ。格子の入った曇りガラスの向こうには、人の気配はないように思えた。それともそれは、ぼくの願望だろうか。
そしてまた、かしゃん、と、
ぼくを呼ぶ音がする。
戸の向こうに、真っ白なあの子の幻を感じる。
呼ぶな。
隣に立っていた陽が、すうと前へ出た。素足のまま土間に立ち、戸の前で立ち止まる。
かしゃん。
また、ぼくは呼ばれる。
呼ぶな。
ぼくを呼ぶな。
陽が戸に手をかける。ぼくは逃げ出したいと心の中で痛いほど願いながら、土間に降り立ち、陽の隣に立った。
そして。
陽は、戸を開けた。
しかしそこには、誰もいない。
もうもうとした霧、息詰まる濃密な夏の匂い、かすれるように窺える家の門、塀、その先にまっすぐと伸びているはずの道は、霧の幕の向こうに薄れ消えている。
気づけばぼくは、その霧の粒を愛しむように、眺めていた。
誰もいない。
そうしてどれくらい経ったろうか。ふと、陽が下に目をやっていることに、ぼくは気づいた。ぼくも下を向く。

そこには、小さな三毛のねこが居た。
「なぁ」
それは、そう鳴いた。
そして引っ掻くようにして、ガラス戸を前足でつついた。ねこは、ぼくらを見上げた。
「なぁ」
陽は、じっとねこを見つめた。
それから、勢いよく戸を閉めた。

「ねこ？」
崇嗣が鼻にかかった呆れ声で問い返した。陽はそれに答えず、布団に入る。ぼくも後に続いて、並んだ布団の合間を歩き、自分の布団の中に潜り込んだ。布団に残る薄れた温もりが、逆に肌に心地よかった。
陽は急に機嫌を悪くしたのか、黙ってこちらに背を向けたまま、布団を首まで被っていた。一体どうしてしまったのか、ぼくには分からなかった。けれど健太も崇嗣も、その不自然さには気づいていない様子で、緊張が解けたのか他愛のないことをぺちゃくちゃと喋り合っていた。弥生ちゃんはじっと考え込んだ風で、何も言わない。
そしてぼくは、こちらを見上げるねこ、その鳴き声、波打ちたゆたう霧、不思議なほど強く戸を閉める陽の姿を思い浮かべ、それから、なぜねこが戸を衝いたのだろう、と考えていた。
「あのね」
その時、弥生ちゃんが唐突に、さっきの続きを話し始めた。
「私は、かずちゃんは、いつか帰ってくるといいな、と思う。誘拐されたのでも、なんでもいい。そのうち大きくなって、一人で船に乗って、突然この島の港に戻ってくるかも知れないし、そうだといいなって思う。生きているなら、また会いたい」
くぐもるように言葉は終わる。部屋は静かになる。
それからぼくは、想像した。
頭の中には、おとなになったかずちゃんが、一人港に降り立つ姿が浮かんでいた。

一人歩いて懐かしい商店街を、町並みを、神社を、そして森を行く。
あの場所へ向けて。
けれどそうだとしても、いったい誰が、かずちゃんを迎えてあげられるのだろう。
きっと島には、誰もいなくなっているんじゃないだろうか。
そんな島を、どうして見せることが出来るだろう。
あの優しい、綺麗な眼をした子に。
それとも誰もいないほうが、よいのかも知れない。
「寝よう」
陽は言った。軽く身を起こし、小さな灯りを消す。
真っ暗になる。そして、ぼくらは眠った。
あたたかい夏の薫りと、古い布団の匂いを吸う。誰かが身を揺らす。
ぼくは息を吐いて、心地好い暗闇の中へと落ち込んでいった。

5.

目を覚ますと、ひとみは顔に乾いた涙の痕を感じた。
昨日のことを思い出すなり、起き抜けで揺らぐ意識がぴたりと定まり、反射的に身体を起こして窓から外を見た。そして、霧に満たされた様を認めると彼女はうつむいた。
何かをしなければならない。
いつもなら満足に目覚めるまで一時間はかかるところを、ひとみはとっとと身支度を済ませ、そして両親と共に黙々と朝食を食べた。普段ならテレビが埋めてくれる間も、今日は空いたままだった。両親に会話はない。黙って父は茶碗を突き出し、黙って母はそこへよそう。ひとみはそれを、黙って見ている。
――いつ、母は諦めたのだろう。
母の顔に、随分染みが増えた。
食べ終えると食器を片付けて、それからひとみは両親に気づかれないようそっと、玄関から外へ出た。
笑い出したくなるほど深い霧で、辺り一面真っ白だった。着ているシャ

ツが、たちまち濡れそぼつ。肌に張り付き気持ちが悪い。顔をしかめたひとみは周囲を見渡しながら、こどもたちを助けるため、まずどこへ行ったものかと考えた。少し歩いてまた周りを見る。何も見えない。

ここはどこだろう。ひとみは首を傾げた。家から出ていつもの道を通り少し行った辺りだから、まだ商店街の中のはずだ。島では一度も感じたことのない不安感が、胸の内に芽生える。大丈夫だろうか。本当にこの道で合っているのだろうか。自信がない。

本当にこれで、合っているのだろうか。

「なぁ」

突然小さい声がして、ひとみは飛び上がるほどに驚いた。

足下に目を向けると、そこには、小さなねこがいた。

茶色い毛をした、痩せたねこだった。飢えて足がふらつくのか、軽く震えているようにも見えた。ひとみはおうおう、と小声で言いながら、ねこを抱え上げた。思っていたよりも、それはずっと軽かった。

「どうしたーこんなところで。珍しい。いつも灯台のとこにいるじゃない。おなかすいたのかー？」

こどもをあやす口調で話しかけても、ねこはなぁなぁと鳴くばかりだった。

「ごはんは今はないからなー、後でまた会ったら何かあげようなあ」

そう言ったとき、ひとみは足下に五、六匹のねこが集まっていることに気づいた。

白いの、黒いの、灰色の、三毛の、まだらのと、様々だった。皆一様に痩せて、震えていた。そして、なぁなぁ、と鳴いた。そうする間にも、霧の中から数匹のねこが静かに現れる。ひとみは口をつぐんだ。

足にまとわりつき、ひとみのスニーカーを爪で引っ掻きながら、そうしたねこたちは鳴き続ける。目をつむり後足で耳を掻くもの、他のねことじゃれ合うものもいる。行儀よくお座りして、ひとみを見上げるものもいる。

曇りのない眼で、じっと見上げている。

ひとみは抱きかかえた一匹をそっと降ろす。手にしがみつくその仔を何とか置くと、踏みつけないように気をつけながら、ねこの集団の中から足を抜いた。少し歩いてから振り返ってみると、ねこはみんなひとみに付い

てきていた。ひとみは、口をへの字にした。
商店街の中を、ひとみは黙って歩く。後からねこが、時折鳴き声を上げつつ付いてくる。そうして霧の中を数メートル歩くと、そこにもまた、別のねこがいた。少し行くと、またいる。歩いて近づいてくるのもいれば、待ち構えていたように座っているものもいる。これらが皆、ひとみに付いてくる。気づけば、ねこたちは十数匹にまで増えていた。ぞろぞろぞろぞろと、ひとみの後を行進していた。ひとみは渋い顔をした。どこにいつから、こんなにねこがいたのだろう。
早足で歩いてみる。振り向く。やはり、付いてきている。
息をのみ、ひとみは駆け出す。ねこは走って付いてくる。
走る途中に出会ったねこも、一匹残らず付いてくる。ひとみはひたすら、走り続けた。
ようやく目的地に到着する。荒い息づかいのまま、ひとみは雑貨屋の裏戸を叩いた。少しも経たないうちに、アルミの茶色く安っぽい戸が開き、中から無骨な顔立ちの若者が顔を出した。
「どした」
「脩一。あれ、お父さんは？」
「まだ寝てる。最近起きるのが遅いんだ」そして脩一はひとみの足下に目を遣り、顔をしかめた。「何？　ねこ？」
「ああ、うん、なんかね」ひとみは気まずそうに苦笑いした。「なつかれちゃってね」
ひとみの周りをぐるり囲むようにして、何十匹かのねこが円を作っていた。
「ふうん」
あまり気にしない様子で脩一は言った。物事に無頓着な奴で助かる、とひとみは思う。
「で？」
「ああ、ちょっと、今いい？」
「いいけど」
すぐに、二人は家を出た。相変わらずひとみの後には、ねこの一群が続いていた。

「なんかしたの？」
それを見て脩一が尋ねる。ひとみは肩を竦めた。
「ものすごい気に入られたか、ものすごい恨まれたか、どっちかだね」
「へえ。で、どこ行くの？」
すぐに頭を切り替えて、脩一は言った。一見無愛想だが、彼は頭の回転は速いし、聞き上手だった。それはこどものころから変わらない。ひとみは答える。
「春文のとこ」
途端に脩一は、肩を落とした。
「嫌？」ひとみは訊く。
「いや、おととい祭りの後別れたきりだから」ますます脩一は苦い顔になっていく。「がばがば飲んで動かなくなったから、介抱しながら家まで連れて行って、親父さんに引き渡した」
「で？」
「飲み過ぎたの俺のせいにされる」
「なにそれ」ひとみは笑う。「無茶苦茶じゃない。よし、ひとみ先生が叱ってあげよう」
くすりと小さく脩一も笑った。こんな風にして、三人は幼い頃からいつも一緒にいたものだった。嫌だ嫌だと言いながらも、いつだって仲良く過ごしていた。
商店街を過ぎ、しばらく霧の向こうに町並みを見ながら二人は歩いた。途中から二人とも、何の気もなく黙ってしまう。脩一は元来無口な質(たち)で、普段から無理に話すこともなかったし、それに、少し前から二人の間はぎこちなかった。
――ぎこちなくなったのは、どちらのせいだろう。
――そもそも、なんと言って告白されたのだったか。
ひとみは思い出せない。
いつだったかはよく憶えている。高校三年の時、正月に帰省して、そのときだ。
特に前置きもなく、普通に会って久しぶり、と会話している内に、脩一はさらりと言った。手紙にするわけでも、待ち合わせするわけでもなかっ

た。脩一らしいといえば、あまりに脩一らしいやり方だった。だから、思い出せないのだろうか。

そしてなぜ自分は、振ったのだったろうか。

ひとみは、思い出せなかった。

橋のたもとに置かれた顔のない石の像が、視界の端をよぎる。

流れているはずの川は、水音もうかがえなかった。

「ひとみ」

急に話しかけられて見回すと、ひとみはもう診療所の前に立っていた。いったどりついたか、どこをどのように来たか、思い出せなかった。歩いているという意識すら、霧は奪うようだった。

ねこは、いつの間にかいなくなっていた。

裏に回って、住居の方の玄関チャイムを鳴らす。戸が開き、いつものように春文と陽の母が迎えてくれた。

「あら、春文？」二人が頷くと、彼女は困り顔で笑った。「ごめんなさいね、あの子まだ寝てるから。って、うちの人もなんだけど。ちょっと起こしてくるから、待っててね」

そして背を向けるなり、彼女は春文、起きなさぁい、お客さん、と大声を張り上げながら、家の中へと戻っていった。二人は所在なく、玄関前で立ちつくしていた。

何してるの、顔洗って、着替えて着替えて、いくつになったの、はいはい急いで、などという声、そしてそれに応える、眠たげなうなり声が聞こえてきた。幼い頃から何も変わらない。ひとみは内心笑った。二十歳を少し過ぎたところで、こんな程度だ。

――こどもと何が違うものか。

五分ほど待った挙げ句、ようやく春文は、仏頂面で出てきた。

「んだよこんな朝早く。誰」

そして二人の姿を見るや、彼はすぐにいやらしい笑みを浮かべた。

「ん？　やっぱり付き合うことにしたの？」

ひとみは脱力する。隣にいる脩一も、表情こそ変えないが、どう思っていることだろう。一番触れて欲しくないところにピンポイントで話題を振るのが、春文の昔から持つ悪癖だった。当人としてはさほど悪気はないら

しく、こちらが怒ると、冗談だよと笑ってごまかす。
こういった、本人に自覚のない馬鹿なところが彼のある種の魅力だったが、自分たちのように相当慣れた人間でもない限り、好いてはもらえないのではないだろうか、とひとみは思う。職場では果たして、どんなポジションにいるのだろう。想像するとなかなか痛々しく、彼のこの精一杯の気張った態度も、張り子にしか見えなくなる。
ふっと息を吐くと、ひとみは気持ちを切り替えた。
「話があるんだけど、今いい？」
「叩き起こしといていいも悪いもないだろ。飯まだだし。どんぐらいかかるの？　長いんだったら嫌だ」
「いいから来なさい」
ぐちゃぐちゃと理屈をこねる春文を放っておいて、ひとみは踵を返して歩き出す。脩一も、何も言わず付いてくる。
「えー」
春文は小学生のような不平の声を上げたが、結局すぐに靴を履いて付いてきた。昔からこんな風に、お互い何かと文句を言いつつも、最後には必ず三人一緒に行くことになるのだ。
「で、どこ行くの」
歩きながら、脩一が尋ねた。ひとみは逆に問い返す。
「うーんと、今何時か分かる？」
空を見ても太陽がどこにあるのかすら分からず、日差しでは時間が計れない。一面の霧は、時間など無用のものに感じさせる。
「今？」春文が少し上を見て考える。「俺が起きたのが八時過ぎだったけど」
「まだそんな時間か」ひとみは呟いた。「早いかな」
「だから何が」
いらついた口ぶりで春文が問うた。こらえ性がないのも、小さい頃からだった。顔の作りはよく似ているのだが、静かで落着いていた大先生とは、性格がまったく違う。
春文の祖父である大先生は、遊ぶもののないこの島で、よく虫取りや工作を教えてくれたものだった。しかし春文は、集中して何かをするという

ことが一向に出来ない。いつだって上手に出来ず、祖父に泣きついていた。何かに付け器用な祖父とは、対照的に映った。

それももう、二十年近く前になる。

「なあ、ひとみっ」

どやされて、ひとみは我に返る。静かな霧は物思いを誘う。

「うん。じゃあ、行こうか」ひとみは意を固めて言った。「付いてきて」

「どこへ」春文がしつこく問う。

「いいから。付いてきて」

それだけ言うと、ひとみは歩き出した。

6.

ぼくは目を覚ました。

霧とカーテンを通して、外からうっすらと紫色の光が射している。周りを見ても、まだ誰も起きていない。陽と弥生ちゃんは、姿勢正しくほとんど布団も乱さないまま寝ている。健太は布団を蹴り飛ばし、横へ転がり込み、崇嗣はその健太に布団を占領され、隣のふすまに身体を押しつけられて苦しそうにしている。みんな、寝息は静かだった。

壁の時計に目を向けると、まだ五時少し前だった。寝たのがせいぜい十時過ぎだから、これでもいつもより長く寝たくらいだ。みんなを起こさないように、ぼくは廊下へ出た。

廊下のガラス窓から外を見る。昨日と何も変わらない。とぎれなく、一面霧ばかりだ。ひょっとするとずっと前から変わらずこんなだったかも知れない、と思えるほどだった。

いや、それとも。

本当にそうかも知れない。ずっと前から霧は出ていたのかも知れないし、おとなたちとも声は通じていなかったのかも知れない。ずっと昔から、おとなとこどもは一度だって通じ合ったことがなくて、だからそれぞれ別の場所に住んで、語り合うことなどなかったのかも知れない。そんな幻を、ぼくは思い浮かべた。

ぼやぼやと考える。

そうだとしても、かまわないじゃないか。
今のまま、ずっとこのままでいればいいじゃないか。
みんなしてこの家にずっといて、煩わしいおとな達と会うこともなく、楽しく暮らしていればそれでたくさんだ。言葉が通じないのなら、わざわざ会う必要なんかない。どうせ話すほどのことも、ないのだから。
語り合うことの出来るぼくらだけで、一緒にいればそれでいいじゃないか。
何も見えない窓の外に何かを見ながら、ぼくはそんなことを考えていた。
ぼくはふと、隣の部屋の閉じたふすまを見遣る。この中では、おばあちゃんが今も眠っているはずだ。そしてぼくは、それを確かめる気になれない。
ぼくはその閉じられたふすまを、廊下にたたずみじっと見つめる。
ふすまの隙間から洩れ出る、強力な沈黙を感じた。
耐えられなくなって顔を背け、ぼくは急いで違うことを考えることにした。今日はなにをすべきか、今からなにをすべきか、これからなにが起こるか。しかしどれをとっても、愉快な結果になるとは思えなかった。ぼくは陰鬱な気持ちに落ち込んだ。
もういい。全て忘れよう。
そう思って、ぼくは着替えるために自分の部屋へと向かった。
刹那刹那で生きていれば、楽なのだ。
ぼくはいつもそんなだし、きっと陽も、そうだろう。
部屋に着いても、服を選ぶことすら億劫だった。偶々手近にあった着慣れないものを適当に着てから、ぼくは今度は、洗面所へと向かった。
洗面所の戸を開けると、中にはすでに陽がいた。ぼくは驚く。陽は何の気配もさせず、ふっと居ることがよくある。洗面所の中には、朝の冷たい空気が詰まっていた。
「おう」
タオルを持った陽は言った。これから顔を洗うところらしかった。
「起こしちゃった？」ぼくは尋ねた。
「いや」
そう言った陽は、少しの間ぼくの姿を眺めた。

「珍しい格好、してるな」
ぼくは、何も応えない。陽は首を傾げた。
「使う？」
「いいよ」ぼくは譲る。
陽が顔を洗っている間、ぼくは陽の姿を、後ろから見ていた。顔中を丁寧に、ゆっくりと洗っていた。一通り洗い終えると、陽は髪を手櫛で払って整えて、それからふと気づいたようにあごへ手をやった。続いて、鼻の下もさわる。
少し伸びたひげをいじっているようだった。
振り返ると陽は、なにも言わずに脇に退いた。
顔を洗いながら、ふと鏡を見ると、背後になぜかまだ、陽が立っていた。なにもせずただ、ぼう、と立っていた。
そうしてじっと、ぼくを見ている。
「なに、どうしたの？」
顔を拭きながら、ぼくは尋ねた。
緩んだパジャマ姿の陽は、うん、と小声で言って、そのまま動かない。
それから陽はゆっくりと、ぼくに近寄ってくる。ずっと目が合ったままだ。
すぐそばまで来る。お互い、身体の熱が感じられるほどの近さだった。
ずっと、目が合ったままだ。
辺りはひどく静かで、怖いほどだった。
けれど陽は、不思議なほど優しい表情を浮かべている。
「どうしたの？」
ぼくは繰り返す。陽は応えない。
無言の陽は、そばにいるとなんだか、ずいぶん大きく感じられた。
陽は少しだけ、腰をかがめる。ぼくと、目線の高さが同じになる。陽は、なにも言わない。
「陽？」
陽の整った顔は、悲しげにも見えた。その理由は、僕には分からない。
分からない。
ゆっくりと、陽は顔を、ぼくに近づける。

もう、目前に、
そしてそっと、唇を、ぼくの、近くへ、
なぜ？
部屋は、静かだ。
陽？
ぼくは、はじめて陽のことを、
怖い、と感じた。
なにも分からないままぼくは、息苦しくなって陽の顔から視線をそらした。
すると開いたドアから見えるその向こうの廊下に、弥生ちゃんの姿があった。昨日ぼくが居間に干した着替えを、腕に抱えている。息を呑んで、こちらを見つめているようだった。
ぼくの視線の向きに気づいて、陽もとっさに振り返った。途端に弥生ちゃんは慌てて、何とかこう言った。
「ごめんなさい」
そして、急いで廊下を行ってしまった。陽は呆然とそちらを見たまま、動かなかった。
「陽」
ぼくは、出来る限りの静かな怒りを込めて言った。
すごく、腹が立っていた。
陽は悲しげな表情を強める。それは、自分のやったことへの反省からかも知れない。
そして、なにも言わないまま、陽は洗面所から立ち去った。ぼくは、独りになった。
どうしたのだろう。あんな、強引な陽は、初めてだった。
おかしかった。
陽は、なにを不安がっているのだろう。
なにを焦っているのだろう。

なにを怖れているのだろう。
ぼくは独り残されたまま、考えた。

その後は、何かがどこか、おかしかった。
居間に戻ると、もうみんな起きて、着替え終えていた。まだ六時前だけれど、やはり長寝が過ぎてもう眠れなかったのか、ぼくが起きた後すぐに、みんなも続いたらしい。外はまだ、薄暗かった。
昨日のうちに居間に干しておいた洗濯物は、みんな乾いていた。健太も崇嗣も半分寝ぼけていて、弥生ちゃんが居るのになにも考えず、それを取って着替え始めたらしい。それで弥生ちゃんは着替えを抱えて慌てて逃げて来たのだ。その先ではぼくらがまたあんなことになっているのだから、さぞ困っただろう。あの後は、どこか違う部屋へ着替えに行ったようだった。
健太と崇嗣はそうしたあれこれにもまったく気づかず、慣れない時間に起きたせいか、眠そうな顔のまま布団をたたんでいた。そして陽も、黙って二人と一緒に手を動かしていた。ぼくはそれを確認してから、なにも言わず、台所へ向かった。
廊下の途中で、着替えて仏間から出てくる弥生ちゃんと鉢合わせした。
弥生ちゃんはずっとうつむいたままでぼくに気づかない様子だったけれど、ぼくとぶつかる直前で、突然顔を上げた。まっすぐ目が合う。なにを言ったらいいか分からなくて、ひどく気まずかった。弥生ちゃんも、手に持ったパジャマを握りしめて、小さく縮こまっていた。
「あの、このパジャマ、どうしたらいい？」
遠慮がちな調子で、弥生ちゃんはそう言った。
「ああ、うん、洗濯機の前に置いといてもらえれば、いいよ」
ぼくも詰まり詰まり答えた。弥生ちゃんは逃げるようにして、居間へと駆け込んでいった。ぼくはそのまま、台所へ行った。
台所に入ってから、朝ご飯をどうしたものかと少し考えたけれど、考えがまったく先に進まなかった。何も考えず、ぼくは昨日の残りの煮物や味噌汁を、適当に食器へよそった。ご飯は昨日食べきってしまったので、も

うなかった。
頭の中が何だか熱く、澱んでどろどろとしていた。首や肩が、どうにも重い。理由はよく、分からなかった。起きたばかりだというのに、今からすぐにでも眠れそうだった。
お盆を持って、不確かな足どりでぼくは居間へ行く。ちょうど陽たちが布団を片付け終わり、部屋の隅に立てかけてあったちゃぶ台を、元の場所へ置いたところだった。そこにぼくは、お盆をがしゃんと雑な音を立てて置いた。
「え？　こんだけ？」怪我もだいぶ癒えた崇嗣が、朝早くから軽口を叩く。
「厳しいって」
ぼくは何も応えない。何も応える気がしない。崇嗣の方も、起き抜けでまだ本調子が出ないせいか、そのまま言葉を詰まらせてしまう。朝独特の静けさに満ちた、嫌な間が空く。
「じゃあ」陽がようやく口を開いた。「食べるか」
それを聞いて、みんなまるで座ってはいけない場所に座るように、おずおずとちゃぶ台の周りに腰を下ろした。
ぼくの隣に座っていた健太が、突然こう言った。
「電気。齋夜、点けて」
「え、なんで」
「近いから」
健太はつまらなそうに言った。見上げてみると、ぼくの頭の真上に蛍光灯のひもがあった。けれどぼくは、象のように身体が重かった。立ち上がりもせず、ぼくは応じた。
「健太が手伸ばして点ければいいじゃない」
「それぐらいやってくれたっていいだろ」健太も言い返す。
「何で自分で点けないの」
自分でも思いも寄らないほど、意地の悪い言葉が口をつく。元々ぼくは、朝は機嫌が悪い。それに、今日はなんだか変だった。ぼくの気分の方か、それともこの場の雰囲気の方か、とにかく、何かが変だった。
健太はぼくのそんな言葉を聞くと、眉間に深くしわを寄せた。意固地になってこう言う。

「じゃあ、もういい」
何をそんなに意地を張っているのだろう、とぼくは思った。普段なら、立ち上がってちょっと手を伸ばしてひもを引くくらいのことはするのに。不自然に感じられるほど、健太は頑なだった。
耐えきれなくなったのか、陽が黙って立ち、手を伸ばしてひもを引いた。がち、と低く不機嫌な音を立てて、蛍光灯が点いた。
陰気な光が部屋を照らした。
外から差し込む光は半端で曖昧で、電気をつけないと暗いけれど、つけたところで違いが分かるほど明るくはならなかった。陽もそれを感じたのか、力なく座り込んだ。健太も崇嗣も仏頂面で、そして弥生ちゃんは、さっきから一言も口をきかないままだ。厭な間の悪さだった。
この無気力は、何だろう。
朝だからだろうか。朝だからみんな低血圧で、それで元気が出ないのだろうか。でも少なくとも、ぼくはそれだけではなかった。陽のあの強引な振る舞いのせいだ、と一言で済ませられるような単純な感情ではなく、もっと根っこのところからじわじわと漏れ出てくるように、奇妙な疲れ、虚しさのような何かが、身体中へと染み広がっているのだ。
たとえるなら、小学校の修学旅行、その二日目の気分に似ていた。旅行している友達も先生も同じなのに、ぼやぼやとした疲れのせいで思うように楽しめず、それが余計に、気持ちを沈ませる。一日目ではしゃぎ疲れてしまったから、というだけなのだろうか。ぼくは違うと思う。
何かが変わってしまっているのだ。ただそれが、分からない。
突然、なぁ、と気の抜ける鳴き声が聞こえた。みんなびくりとして、音の方を見る。
廊下のガラス戸の向こう、霧の中に、尾を立てて庭をゆらゆらと歩くねこの姿が見えた。

冷たくなったかぼちゃを半分くらいつついた辺りで、健太がふいに変な動きを始めた。
右肩を前後に少しだけ揺さぶって、その度に眉をしかめる。時々、くっ、

と聞こえないほどの小さな声を立てている。
「どうしたの」弥生ちゃんが、久しぶりに口を開いた。
「うん」健太はぼそぼそと言う。「湿気があると、痛むんだよ」
「怪我してるの？」
弥生ちゃんは、心配そうになおも尋ねた。
すると、ほんの一瞬躊躇うような素振りを見せた後、決心したかのように、健太は話を始めた。
「いや、治ってるけど。もうずっとこう。これ以上は、よくならない。その、高校入ってから、練習しすぎてさ。一年ぐらい前に、こんなんなって。もう、うまく上がらないんだ。だからもう俺、今は野球は、応援専門。高校出たら、島に戻って、親父の手伝いで酒造り」
そう言うと健太は、ニッと歯を見せて笑った。
誰も、何も言わなかった。
健太に同情してではなかった。憐れんでもない。みんな、健太の気持ちが、よく理解出来たからだ。みんなそれぞれが、きっと今、何かしら同じような気持ちでいるからだ。
夢破れて、とかそんな大袈裟な話じゃなくって。
ただ、何かが終わってしまったような、ぼんやりした寂しさを感じるだけだ。
ぼくは、誰にも聞こえないように、小さなため息を漏らした。
「帰りたくねー」片膝ついた崇嗣が、急に大きな声を出した。「帰りたくねー」
初めは誰も何も返事をしなかったけれど、次第に息が漏れ、最後には小さく吹き出した。みんなして笑う。
「ほんとだね」弥生ちゃんが、一番よく笑っていた。「帰りたくないね」
「つまんねー」崇嗣は重ねて言った。
「だよなあ」健太がちゃぶ台に肘を突き、感慨深げに呟いた。「っかしいよなあ。もっとさ、小っさい頃さ、こう、何か、もっと楽しくなかったか？」
みんな笑って、強く頷いた。そうだ。小さい頃は、別に何もなくても、ひたすら楽しかった。ぼくらには、何も要らなかったのだ。楽しくて、それだけだった。

あれは、何だったんだろう。
「ここんとこ急激につまんねー」
崇嗣が気の抜けた口振りで漠然と、けれど具体的に言った。みんな、乾いた笑いを漏らす。崇嗣は続けた。
「この先もっとつまんねくなんの？　やってらんねー」
「陽はどうだ」健太が陽を見た。「さっきから黙ってるけど」
黙々とかぼちゃの煮物を口へ運んでいた陽は箸を止め、少し迷っていた。
「うん」そして言った。「つまんねーな」
「んー、なんだこれ。変だぞ、どこで間違えた？」
健太は腕を組んで、悩ましげにふざけてみせた。
「これって、間違いなの？」
弥生ちゃんは苦笑している。
「正解でも間違いでもどーでもいいけど。とにかく、つまんねー」
崇嗣が分かりやすくまとめると、またみんな笑った。

何が、なんてことは、みんな分かっていた。
言葉にすれば嘘になる。だから、何の話なのか、誰も言わない。

そんなぐだぐだしたおしゃべりを、ぼくらは、というよりぼく以外の四人は、続けた。ぼくは、それを聞くだけで満足だった。ちらちらと言葉の端々にうかがえる、ぼくには縁遠いものごとが、耳に入っては消えていく。
結婚だの、
就職だの、
進学だの、
跡継だの、
きっとみんなが苦しんでいるのが、それなのだろう。
いずれにせよ、ぼくには関わりのないことばかりだった。
「前の方で道幅いっぱいのでかい口開けて、俺が入ってくるのを待ちかまえてる感じ」
健太が抽象的に、けれど分かりやすく言った。
みんなははっきりしない話を、のらりくらりと続けた。まずかったご飯

も、意識せずに口へ運ぶうち、みんななくなった。会話は、普段ないほどに長い間が空いて、それから一人一人が思いついたことを、ぽつりと口にする、という調子だった。ゆっくりと、進んでいく。

それをぼくは、静かに聞いた。

ときおり激する声もあった。小声で呟くこともあった。話しているうちに、本人が何を話しているのか分からなくなって、途中でやめてしまうこともあった。いつの間にか同じ話をしていることもあった。言葉が途切れて、照れ笑いに変わっていくこともあった。

それはきっと、言葉なんかみんな嘘だからだ。何を感じていても、何を思っていても、言葉に変わったときには、もう違うものになってしまっている。自分の気持ちが言葉へ作り替えられてしまうと、途端にどこかまるで他人事のように遠くなってしまう。だから話そうとしても、躊躇してしまう。

けれどそれでも、みんなの話は尽きなかった。内に溜まったものを一つ残らず出してしまいたいかのように、ぼくたちは飽きることなく、話し続けた。

少しだけ暗い部屋の中で、ぼくらはそんな話をいつまでも、いつまでもしていた。

話を聞きながら、ぼくは考えた。

ぼくは、どうなんだろう。

去年の三月に別れてから後、みんなに何があったのか、今何に迷い、何を決めかねているのか、ぼくは知らない。わざわざ具体的な話を聞く気もしなかった。こんな漠然とした会話で、ぼくには充分だ。みんな、何かに迷っている。それだけで充分だった。

けれど。

今のぼくには、もう迷い選ぶものすらない。

行き止まりだ。

ぼくは、静かに目をつむる。

そこには、白い衣のあの子が見える。

あんな風に、ぼくも生きられれば。
そう思う。
そしてそれは、叶えようと思えば、叶う望みなのだ。

どれくらい経ったか、よく分からない。
突然だった。
何の前触れもなく、玄関の開く音が聞こえた。

7.

ひとみは鳴橋家の玄関を、チャイムも鳴らさず勢いよく開けた。隣で春文が、大きな音に首を竦めた。脩一は無表情のままだった。
「おいお前横暴だろ、いくら先生だからって」
尻つぼみな声でつまらない非難を口にする春文を無視して、ひとみは勝手に家の中へ上がり込んだ。ここへ来るのは何年ぶりだろう。齋夜が小学生の頃、ちょくちょく家まで送り届けてやったことを、ひとみは思い出す。そしてその頃からのこの家の変貌に、愕然とする。
――あの人も、あの人も、みんないなくなってしまった。
そして一歩入った瞬間、あの頃とまったく違う雰囲気を、ひとみは強く感じた。
半ば死んだような家になっていた。
玄関にはすっかり硬化した静けさが漂っていて、外の生暖かく茫漠とした霧の空気と、極端に対照的に感じられた。何よりも、本来なら伝わってくるはずの人の居る気配が、全く無かった。人が居ることは分かっている。だが、恐ろしいほどに静まりかえっている。理由を知っていても、その不自然さは思わず足を留める。ひとみは入りたくなかった。けれど、逃げたくもなかった。
――逃げたって、きっと追いかけてくるのだから。
ひとみは習慣的に奥へ向かって声を掛けようとして、すぐにやめた。すると丁度よく、廊下の向こうから足音が聞こえてきた。上がり框に腰を下

ろして、ひとみはその主を待った。
すたすたと歩いてきたのは、齋夜だった。
普段は無表情ながらも柔いぼんやりとした顔つきをしていることが多い子だが、今は珍しく、訝かしむような様子だった。こちらを警戒してのことかも知れない。しかし、来客が誰なのか気づくと、今度は目を丸くして口を開き、何か言おうとした。そして、すぐにやめた。
ひとみは座ったまま、微笑んで齋夜の顔を見上げた。念のため訊いてみる。
「ゆうちゃん、聞こえる?」
齋夜はかすかに眉をひそめ、それから悲しげな顔になってこう言った。
「　　」
やっぱりそうか、とひとみは思う。
改めて確かめたところで、得られるものは何もなかった。空しさが募るだけだ。
「何だ、この子もか」
後ろからの声を聞きつけて、ひとみははっと振り返る。言ったのは春文だった。
「何だよ」
「この子も、ってなに」ひとみは問いただす。
「え？　ほら、このロパクの嫌がらせ」こともなげに春文は言い放った。
「陽もおんなじようなことやってたからさ。なんか、流行ってんのかと思って」
ひとみは唖然とした。
「あんた、知ってて何とも思わなかったの」
「何が」春文は間の抜けた顔をしている。
それを聞いて、ひとみは次第に不安になってきた。ひょっとして、こんなことでいちいち騒ぐのは恥ずかしいことなのだろうか。嫌がらせだと春文は言い切ったが、そう考えるのが普通なのかも知れない。他愛もないこどものいたずら。春文の口ぶりでは、あたかもこんなことがどこででも起こる、ごく当たり前のことのように聞こえた。
そして、そう言われればそうなのかも知れないという気になってくる。

本気になって、こどもたちに何事か起きた、などと心配するのはおかしいのか。こんなことを一生懸命問題にして、悩み考えるのは、おかしなことなのだろうか。困惑した顔で立っている齋夜を目前にして、ひとみは強い不安に駆られた。

――やはり、自信がないのだ。

すると、その時だった。

脩一が、低い声でゆっくりと言った。

「分かった」

ひとみは自分の中に張り詰めていた緊張が、急に緩むのを感じた。そして、肩の力が抜けた。

背の高い脩一を、ひとみは座ったまま、無防備な表情で見上げた。脩一は、それ以上は何も言わず、正面をただじっと見つめているだけだった。照れているのかも知れない。

「分かったよ」

また言い、彼は数度、頷いた。

いくら聡い脩一とはいえ、あれだけのことで完全には理解出来ないだろう。けれど、この奇妙な霧や不思議な状況、ひとみの様子から、何か察してくれたのかも知れない。少なくとも、ひとみを元気づけようとしてくれていることだけは確かだった。ひとみは嬉しくなり、微笑んだ。

脩一がわずかなりとも分かってくれただけで、ひとみにとっては充分だった。ひとみも実のところ、仲間が欲しくて二人をここまで連れてきたのだ。仲間といっても、他のおとな達にこの窮状を伝えるためではない。

――自分の寂寞の巻き添えにしたかっただけだ。

情けない理由だな、と思った。

そして、落着くことの出来たひとみは改めて、齋夜を見すえた。齋夜は、当然ながら何が話されているのか全く分からず、ひとみたちが何をしに来たのかも分からないためか、はっきりと当惑の表情を浮かべて立ちつくしていた。

それからまた向こうから、廊下をそっと歩いてくる音が聞こえた。やって来たのは、崇嗣と、健太と、そして弥生だった。なぜか陽だけが来ない。あの子のことだから、鋭敏に何かを察して出てこないのかも知れない。

齋夜の背後、廊下の曲がり角から、三人ともが不安げにこちらをのぞき込み、顔を見合わせては、一様に妙な面持ちをしている。親が迎えにでも来たのかと思ってみればこんな顔ぶれだから、疑問に感じるのも無理ないだろう、とひとみは思った。

崇嗣たちは、三人ともどこか何かを怖がって、怯えているように見えた。そして各々、小声で何かを話し合っている様子だった。静かな家の中だが、それでもひとみには、何も聞こえてこなかった。

「　　？」

「　　」

そうして彼らは、互いに軽く頷く。どこかで見た光景に似ていると感じたひとみは、ようやく思い出した。

それは、テレビでしばしば見かける、海外の難民のこどもたちの姿によく似ていた。取材に訪れたカメラマンを、不安と疑念と期待の籠もった目で、怖じ気づきながらも一所懸命に見つめている。言葉が通じないということが、見知った子供達をこうも変えて見せるものかとひとみは嘆息した。言葉が通じない者は、すなわち異人なのだ。

ひとみは、再び齋夜と向き合う。齋夜の顔は、この子が幼い頃からそうであったように、見る者の気持ちを微かに柔く揺らした。ひとみはその姿を、その大きな瞳をじっと見た。

黒く澄んだ、綺麗な眼だった。

自分たちの姿は、その眼にどう映っているのだろう。

「帰ろう」

ひとみは言った。脩一は少し首をかしげた。

「もういいのか」

「うん」ひとみは確信を持って応えた。「脩一が分かってくれたなら、いいよ。私もはっきりしたし」

それにこれ以上、こどもたちの場所を荒らしたくない。せめてもうしばらく、こどもたちだけにしておきたい。ひとみはそう、思った。

でもそれは、自分が、この子達とはもう違うものだ、と認めることになって、

だからそれは、諦めだろうか。

もう私は、こどもではない。
そう諦めてしまうのが、おとなとこどもの違いだろうか。

ひとみは顔を上げる。そこには、こどもたちの顔がある。
そこは、こどもたちしか居られない場所だ。もう自分が、帰ることのない場所だ。
無性に寂しくなる。
「帰ろう」
ひとみはもう一度、二人に言った。
するとふいに、目の前で、齋夜が口を開いた。
「　　、　　。　　?」
ひとみは、少しの間考え、頷いた。
そして笑う。お互いに分からないということを、お互いに分かっていた。
それを思うと虚しく、おかしい。
齋夜も、凪ぐようにして笑った。
この子もまた、寂しげだった。
どうしておとなもこどもも、寂しいのだろう。
よく、分からなかった。

すると急に、ひとみのなだらかで静かな考えを、粗野な大声が打ち砕いた。
「あ、お前ッ」
揺らいでいた思考の中からいきなり引き戻されたものだから、ひとみは何事か咄嗟には分からず、慌てて周囲を見廻した。
「おい、ちょっと。お前、俺が昨日どんだけ探したか」
大声を出したのは、無論春文だった。場に不釣り合いな剣幕に、声が聞こえなくともこどもたちは息をのみ、一斉に春文の指さす方を振り返った。
廊下の角から、陽が顔を出していた。
春文に気取られないようそっと様子を窺っていたらしい彼は、顔をしか

め、小さく舌打ちをすると、奥へと引っ込んでいった。一方、激昂した春文は、周りのこどもたちのことなど全く気にも留めず、もどかしげに靴を脱ぎ捨てるなり、断りもなしに陽を追って、上がり込もうとした。呆気にとられて、ひとみは何も出来ない。

「おい、コラ、陽。逃げんなよ。男らしくねえぞ」

使い慣れないちんぴら言葉が、虚しく響いた。乗り込んでいった春文は、必要以上にどたどたと足を踏みならし、それで自らの憤りを示そうとしているようだった。

「朝っぱらから島中あっちこっち、お前探して大変だったんだぞ。どんだけ人に迷惑かけてんだよお前ッ。おいっ、待てよコラッ」

しかしそんな振る舞いは、言葉の聞こえないこどもたちをいたずらに怯えさせるだけだった。弥生は青ざめ、健太は壁際で目を円くし、そして崇嗣は頭を守るように縮こまる。そんなこどもたちの間を春文は傲慢に闊歩し、蹂躙した。

そして齋夜は、ただ立ち尽くしていた。

ひとみの眼には春文の姿が、父、他の多くの漁師たち、町会長、魚屋の店主、職場の同僚、上司、保護者たち、これまで見てきた数え切れないほどの醜いおとなたちと、重なって映った。おとなはこどもの上に立ち、教え育てるものなのだと、信じて疑わない連中だ。

彼らは身勝手で、自堕落で、嘘吐きで、尊大で。

自分がこどもだったことなど、とうに忘れてしまった。

ひとみはそのまま廊下を進んでいこうとする春文の腕を掴み、必死で引きずり戻した。脩一も即座にもう片腕を取り、力を添えてくれた。

「おい、なんだよ、邪魔すんなよ」

そう言って振り払おうと暴れる春文を、二人は何とか、家の外まで連れ出した。

門扉の前に、三人は無言で立つ。

息の上がったひとみは拳で春文の胸を殴ると、ただ一言、こう言った。

「わきまえなさい」

結局三人はそのまま、齋夜の家から立ち去った。

ひとみの眼にははっきりと、最後の齋夜の顔が焼き付いていた。
齋夜は、一人ほうけていた。
そうしながらもどこか遠くを見つめる眼差しで、逃げ去るひとみたちを静かに見据えていた。
それは絶望するようでもあり、そして、哀れむようでもあった。

8.

ぼくは、空しくなった。
陽のお兄さんは、確か今年で二十五、六歳だったろうか。
それでも、あの玄関先での振る舞いは、まるきりどこかのつまらないおじさんのようだった。
ちょっとした陽の態度に怒って、人の家へ勝手に上がり込んで、聞こえないくてもおおよそ見当のつくような、安っぽくて下品な文句を怒鳴り散らす。口を尖らせて、不満に満ちた仏頂面をさらけ出す。声が聞こえない分、余計に見苦しく醜い部分が目立つのは、あのおばさん達といっしょだ。必死で肩肘張って、大袈裟な足音を立てて歩いて、小さな身体を大きく見せようと懸命なその身振りは、まるで、猿のようだった。いつの間に、ああなってしまったんだろう。
そしてあんなのが、ぼくらのほんの数年後の姿なのだ。
やるせなくなった。
三人が行くのを見届けてから居間に戻り、ぼくらは再び、畳の上に腰を下ろす。けれど、話の続きは始まらなかった。もうみんな、出しきってしまったのだろうか。いや、違うだろう。何かがぼくらの口を押さえ、話させまいとしている。
ふいにぼくは、あの三人が、ひとみ先生でさえ、ひどく疎ましく思えてきた。
三人が何を思ってやってきたか、今のぼくには分からない。あの様子だと、ひとみ先生が二人を連れてきたのかも知れない。でも、そんなことはもういい。とにかく、疎ましかった。
陽のお兄さんは言うまでもない。みっともない、恥ずかしい、身勝手な

ことを平気でやる、虚勢を張った見苦しい態度。それと悲しいほど対照的な、すねた自信のない眼、青いひげそり後の目立つ顔、シャツから伸びた細く白い腕。どれもこれももう、疎ましかった。

脩一さんはそれとはまた違った、大切なものが抜け落ちた後のような人だった。以前もああだったろうか。それとも徐々に抜けて、そして今、抜けきってしまったのだろうか。彼はもう、灰褐色に枯れていた。眼はひたすら寂しい。冷たいか痛々しいか、とにかく孤独で、そして何か、澱んだ空気を放っていた。

ひとみ先生でさえ同じで、それがぼくには驚きだった。今日も、綺麗な整った格好をしていた。本土へ行って趣味が変わったのか、それとも何かあったのかも知れないけれど、今日も抑えた色のカーディガンに、ロングスカートだった。

でも変わったのはむしろ、そう、全身から立ち昇る雰囲気だった。島で教えていた頃は、いつも笑って明るい声を出して、元気な姿をしていた。先生になる前、ぼくらと遊んでくれていた頃はもっと、身体のすべてから湧き出るような力を感じさせてくれていた。それは、先へ進んでいく力だった。

今も、笑顔を浮かべてはいた。玄関に腰掛けて、逆光で暗く見える先生の、ぼくへ向けられた笑顔を思い出す。

疲れた笑顔だった。

なぜだろう。

そしてそうしたすべてが、ぼくらの数年後の姿なのだ。

健太も崇嗣も弥生ちゃんも、陽も、あの三人から何を感じたろうか。

もちろん、みんな違うことを感じているだろう。

それを聞くのが、ぼくは怖かった。

聞いた途端、何かが壊れて、

終わる予感が、

「これから、どうする」

陽がとうとう、それを言った。
誰も、応えなかった。

誰かが応えたら、そのときに、
終わりが始まるのだろう。

9.

ひとみはため息を吐いて、頭を抱えた。
ある程度は理解してくれた脩一、何故怒られたのかすら分からず困惑するばかりの春文、どちらにも、もっときちんと説明する必要がある。けれど、どうにもやる気が起きなかった。ひとみは自分を責めていた。
――齋夜の家に行くべきでは、なかったのではないか。
こどもたちは、こどもたちだけにしておくべきだったのだ。
結果的にとはいえ、こどもたちの中へ土足で踏み込むような真似をしてしまった。
行かずに済ますことは出来なかったにしても、もう少し何か、やりようがあったのではないか。
二人と一緒に黙って歩き続けながら、ひとみは虚しい後悔に苛まれていた。
「や、ひとみちゃん」
ふいに聞き慣れない声に話しかけられて、ひとみは驚いた。慌てて周囲を見回すが、相変わらず霧ばかりで、自分がどこにいるのかも判然としない。そしてようやく、声の主を見つけた。
「なに、そんな驚くことないじゃない。どうしたのぼうっとして。顔色悪いよ」
町会長だった。気づけば、齋夜の家からずいぶん離れていた。橋のすぐそば、診療所の角のところにまで来ていた。町会長は商店街の方角から、橋を渡って歩いてきたようだった。
「いえ、別に」ひとみは呟いた。「町会長さんはどうされたんですか」
「あれ、聞いてない？　昨日家行ったとき言ったでしょ、集会やるって。

今日になっても全然霧が晴れないし、船も出せない状態だからねえ。電話も通じない、テレビも点かないじゃ、こりゃもう手詰まりだわ。それで、一旦町民一同集まって、今後の方策を話し合おうじゃないか、というね」
「集会場で？」
「うんそう。君らもおいでなさいよ。島の将来を担う前途有望な若人たちだからさ」
わはははは、と口を大開きにして町会長は笑った。
「昼過ぎて、一時くらいになったら始めるから。よろしくね」
そう言うと町会長は一方的に話を終わらせ、町の集会場の方へと歩いて行ってしまった。たちまちその姿は、霧の中に溶けていく。
「島の将来を担う、だって。勝手に決めんなっつぅの。なあ」
春文が鼻で笑う。けれどひとみが考えていたのは、違うことだった。
自分はまだ、若人なのか？
そう思っているだけ、言われているだけじゃないか？
どこまでも気持ちは落ち込んでいった。
「ひとみ、本当に大丈夫か」
脩一が言う。普段平板なその声にもどことなく心配が感じられ、ひとみは嬉しくなった。しかし、あの無神経な町会長が気づくくらいだ。自分はいったいどれだけ沈んでいるのだろうか。最近情緒が不安定なのは、自分でも意識していた。
――なるほど、時期が迫ると気が滅入る、というのは本当だった。
いや。
そんな決まり切った言葉に押し込めて済むような気持ちだろうか。自分の気持ちを他人の言葉で自分に説明しても、何の慰めにもならない。そんな逃げ場は要らないのだ。
私が今悩み苦しんでいるのは、それが私のことだからであって。
それ以上のつまらない理由など、もう沢山だった。
「二人ともさ」
ひとみは振り返り、話しかけた。
虚を突かれた表情の春文、微かに笑む脩一。どちらも今、何を思うのだろうか。

ひとみはそっと息をつく。
その瞬間、ひとみの眼には二人の姿が、こどものころと変わらないように映った。

集会場は、学校へ上る坂道のふもとに建っている、古くさい木造の建物である。そこかしこに干からびた蜘蛛の巣が掛かっていて、今は乳白色の霧の中、ぬうといやに存在感を増していた。そこへぞろぞろと、腰の曲がった人間たちが入っていく。老人は老人なりに曲がり、比較的若い者も皆、猫背だった。彼らは霧の中を、恐る恐る歩いてきていた。
ひとみが二人と共にそこへ入ろうと戸に手を掛けると、後ろから声を掛けられた。
「やあ、珠川先生」
ただその声を聞くだけで、ひとみは無性に気持ちが安らいだ。低く優しく、何もかも承知しているかのような響きは、これまでどれだけの生徒の信頼を勝ち得てきたのだろう。自分もこんな先生に、なりたかったのだ。
そして口元に笑みを浮かべると、声の主である水垣先生は、面白そうにひとみに言った。
「何か僕に言いたいことが、あるようだけども」
「え、あ、はい」あっさり心中を見抜かれて、ひとみは動揺する。「えと、その」
「うん、まあ、大体分かるけどもね」
どこまでも揺らぐことがないのが、水垣先生の常だった。
不安を感じる人間にすぐはっきりとした言葉を与えて、よすがを持たせ、落ち着きを取り戻させる。その姿は、ひとみの憧れだった。今を機会に辞めることなく先生を続けていけば、自分もいつの日にかこうなれるのだろうか。
「昨日一昨日とこんな妙な天気になって、何か訊きに来るだろうと待ちかまえていたのに、こどもたちが誰も僕のところに来ないから。妙だなと思ってました。何か、あったのかな？」
問うというよりむしろ、断定するように先生は言う。正直に応えたもの

か、ひとみが迷いながらうつむいてうじうじとしていると、先生はすぐにまた先手を打った。
「こんな変な天気になるくらいだから。まあちょっとやそっとのことでは僕は驚きません」
そして、先生は笑った。

「えー皆さん本日はお日柄も、あまりよろしくはありませんけれども。まあこんなお天気の中わざわざお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。えーまあ今日はですね、声掛けに回らせていただいたときにあらかじめお話ししましたとおり、このなんともならん霧、ならびにテレビ、ラジオ、電話、その他の故障、それから本土との連絡船が来なくなった件につきまして、皆さんからご意見を賜ろうかなと、まあそういうわけなんでありますが。はい津久見さん、なんでしょう」
べらべらと町会長が実のない喋りを開帳している途中、弥生の父親がすっと手を挙げた。
狭い畳敷きの集会場の中、島の人々は敷き詰められるようにして座っている。その多くは、やはり老人である。その中に一人、困憊した神主がいることにひとみは気づいた。鬱々とした表情で畳をじっと見据え、祭りの時の威厳など、すっかりどこかへ消え失せていた。あえて彼が出てきているのは、少しでも息子と引き離しておこうという妻の魂胆だろうか。
指名されると弥生の父は、軽い咳払いを挟んで口を開いた。普段なら彼は、こうした集まりでは滅多に発言せず、むしろ妻の方が出席することが多かった。彼は言った。
「こどもたちのことについては、問題にはなっていないのでしょうか」
「はあ」
いかにも呑み込めていないといった調子で、町会長は相づちを打った。しかし、弥生の父の発言がこれで終わりと分かると、場の主導権を取り戻すべく、直ちに饒舌を再開した。
「こどもたちとおっしゃいますと、ええその、津久見さんのお嬢さんやあれくらいの子たちのことですか」

「ええ」
「その子たちがどうかした、と。うーん、ちょっと私の方には連絡入ってないですなあ。みなさん、どなたか何か、ご存じの方いらっしゃいますか」
皆、顔を背けた。
「あ、ちょっとよく分からないですなあ」
「ですから」いらだちを抑えて、弥生の父は言葉をつなぐ。「うちの子がですね、ちょっとその、なんと言いますか、判別出来ないメモを部屋に残して、家を出たんです。それで探してみると、どうもこどもたちが、鳴橋さんのお宅にみんな集まっている様子で」
「はーあ」底知れないほどの無理解をにじませてため息をつくと、町会長は再び、場内を見回した。「どなたか、ご存じの方は？」
「はい」
早くもうんざりした風の陽の母が、小さく手を挙げる。もちろん若先生は来ていない。
「私も見ました。ひとみちゃんも、ね」
そう言われてひとみもはい、とだけ言った。
「おやおやまあ、それはそれは」
町会長は真顔で頷くと、いやらしい笑みを浮かべた。
「まあそれはあれですな。お宅のお子さんも、自然とそういうお年頃になられているわけですし。なんとかなさりたいお気持ちはよく分かりますが、やはりこういったことは、お子さんを信じて、自然の成り行きに任せておくべきなんじゃないかと」
「何をおっしゃっているんですか」怒りを込めて弥生の父は言い返す。「人を馬鹿にしているんですか」
いえいえ、と町会長は平坦な声で表面上は否定し、両の手で弥生の父を抑える素振りを見せた。
町会長の必要以上に慇懃な口調、ひねくれた物言いを聞いて、ひとみはずいぶん前に母親から、彼はよそ者で貫禄ある津久見さんを疎んじているのだ、と聞かされたことを思い出した。自分の町会長としての立場を脅かしかねない、といったことを、あのごてごてしい口調で当人から聞いたらしい。本気で言うこととも思えなかった。それにしたって何年前のことだ

ろう。
　町会長のしつこさにひとみは内心呆れるが、反面この島の中では、それくらいの時間の流れが当然のものなのかも知れない、と思い直した。本土とは違い、物の変化がほぼ無い以上、人間関係の変容もまた、ないのである。
「あの、そういうことじゃなくてですね、町会長さん」
　陽の母が、用心深く間に割って入った。
「こどもらが五人ほどみんなで一緒に、鳴橋さんのお宅にお邪魔している、という、ただそれだけのことで、別にその、変なことではないんです」
「ああはあ、分かりました」町会長は渋々頷いた。「いやしかし、それにしたってもうお子さんもいい年なんですから、お気になさるほどのことじゃないんじゃありませんかね」
　そう言われて、弥生の父は黙ってしまった。周りの他の男たちも、分かったような笑みを浮かべて、そうだそうだと頻りに頷いている。
　そんな弥生の父の姿を見て、やはり彼は心配なのであろう、とひとみは思った。陽の母にしてみれば、いつも比較的無口な息子が、父親や兄に愛想を尽かして友達のところへ遊びに行っているだけ、ということになるだろうが、弥生の父にしてみれば、素直な一人娘が不可解なメモを残して、何も言わずに家を出て行ったのだ、と思っているはずだ。昨日は気丈に振る舞っていたが、不安はぬぐい去れないに違いない。だが、そんなことをいちいち聞いて理解してくれる人は、この場にはいない。
　こどものことをきちんと想っている彼が、ずるずるとただの過保護な父親だと決めつけられてしまいそうな状況に、ひとみは強い不快感を覚えた。
　それと同時に、あのメモは本当になんだったのだろう、とひとみは眉をひそめる。今思えば確かに文字であり、言葉であり、文章になっていた。けれど、何一つ意を汲むことは出来なかった。見ていたのだが読めなかったのだ。
　まるで、見たこともない外国の文字を見るような。
　あるいは、半ば眠りながら読むときのような。
「あれ、ひょっとして、うちの子もそこ行ってたりします？」
　部屋の片隅で、健太の母親がそう言った。大きく紺地に白の紋を抜いた、

酒屋のエプロンを着けたままで来ている。ひとみが頷くと、アラいやだ、と大きな声で言って彼女は笑った。

「どうりで。いつまで経っても起きてこないと思ってたんですけどね。もう毎朝、私も主人もあれやこれやで忙しくって、あの子構ってられないから、勝手になんか食べときなさいって言ってるんですけど。いなかったの。なるほどねぇ」手を顔の前で振りながら、彼女は喋り続けた。「全然気づいてなかった」

それを聞いて、皆が笑った。しかしひとみは、笑えなかった。崇嗣と同じ頃に齋夜の家へ行ったのだとすれば、健太がいなくなってからすでに丸一日近く経つ。それなのに、全く気づいていなかったのか。

周りの人々は、ほほえましい話だと言って笑う。ひとみには、不気味としか思えなかった。

「えー」町会長が、乱れた場の空気を戻そうと手を叩いた。「お子さんのことはまあ、よろしいじゃないですか。たまの休みでね、こどもたちだって、一緒にいた方が楽しいでしょう。ね。じゃあ、霧の」

「あの」

あからさまに興味のない態度を示して話を打ち切ろうとする町会長を、ひとみは強引に押しとどめた。案の定町会長は厭な顔をする。

「なに、ひとみちゃんも何かあるの？　じゃあ最後。話し合いの最後で、時間取るからね。今早急に話し合うべきは、この困った霧のこと。そうでしょう？　これは、みんなが困ってる。ちゃんと何が重要かをまず考えて、重要な問題から順に話し合わないと。ね？」

ひとみに一言も発させないように素早く言い切ると、町会長は再び多勢の方へと向き直る。ひとみも、当座は黙っておくことにした。少なくとも、発言の機会は与えられたわけだ。

こうして霧、テレビ、電話などに関わる、極めて重要な話し合いが始まった。

「どう思われますかね」

「なるほど、それは一理ある」

「その可能性もありますな」

「しかしそれは我々にはどうしようもないところでね」

「うんうん。ははあ」
「この意見に賛成の方は」
「いやあまいったまいった」
「どんどん発言していただいて結構なんですよ」
「反対の方は。おられない」
「おう、一理ありますなあ、うん」
「お、その意見いただき。なんてね、あはははは」
「それは結構ですなあ」
「ははは」
「それはまあ確かにね、そうとも言えるかも知れませんけれども」
「ふんふん」
「んーいやあちょっと私には分かりかねますなあ。みなさんもそうでしょう？　ええ」
「あはははははは、なるほど、確かに一理ある」
実りのない時間が過ぎていった。
町会長の長広舌を聞き流しながら、ひとみは考え続けた。どう話せば分かってもらえるか。どう訴えれば、耳を傾けてもらえるか。幾種類の可能性を考えても、よい方向に転ぶとは思えなかった。けれど、逃げ出すわけにはいかなかった。
きっと、立ち向かえるのは今が最後だ。

†

自分の考えに自信がない、こどもたちの身に本当にそんなことが起きているのか自信がない、自分はどうするべきなのか、何をするのが正しいのか分からない。
先程外で水垣先生に事情を話したとき、そうひとみはぽつりと洩らした。すると、優しく先生はこう言った。
「珠川は、どうしたいの？」
それを聞いて、ひとみははっとした。
ひとみはそんなことも見失っていた。いや、いつの間にか思いこまされ

ていた。何が正しいのか、自分はどうすべきなのか。そんなどこかにある他人が決めた正解を追い求めなければならないのだと、いつの間にか誰かに信じ込まされていた。そんなことは、今となってはもう、問題ではないのに。

肝心なのは、ひとみがどうしたいかだった。

そして気づいてみればきっと今が、これまでと変わらずどこまでも流され続けるであろう自分の人生に、自らの選択で杭を打ち込める、最後の時だった。

最後だということが怖い。延々先まで見える自分の人生が、すごく怖い。

いつから流され始めたのか。いつから妥協を許したのか。そんなことは、誰にも分からない。

ただ、確かなのは、流されているのも、妥協を許したのも、諦めたのも、すべてを最後に選んだのは、自分だ。

それが、なにより怖い。

実りのない話し合いが三時間に及び、実りのないまま終わろうとしていた。壁に掛かった時計を見れば、時間はそろそろ四時に近い。とうの昔に場の雰囲気はくだけて、そこかしこで私語が交わされていた。それを注意する気もない町会長は、自分の喋りたいことをここ何十分か勝手に喋り続けていた。もちろん、議題に結論など出るはずもない。霧のことなど、何人集ったって何とかなるわけがなかった。初めから手に余る問題だということは、分かり切っていたのだ。それを取り上げたのは、単なる安堵と自己満足のために他ならない。

ぽつぽつと断りなしに外に出て、男たちは煙草を吸っている。戻ってきた者は、煙と脂の匂いにまみれていた。そのまま戻ってこない者も、数人いる。ひとみの斜め前の男は、

船をこいでいる。妙に酒臭いと思ったら、少し後ろの白髪角刈りの男が、小さな酒瓶を出してちびちびと飲んでいた。ひとみは肩を落とした。

部屋いっぱいに響き渡る脈絡のない笑い声が収まったところで、町会長は手を叩いた。

「はい。ええとですねえ、まあ長い間おつきあいいただいた訳なんですけれども、残念ながらちょっと、はっきりとした原因は分からなかった、ということで。結論といたしましては、とりあえずのところ現状のまま持ちこたえていただいて、問題が出次第それぞれ協力して、これを解決する、と。こんなところでよろしいでしょうかな」

話し合うまでもない当たり前のことを、画期的かつ適切な帰結のようにとうとうと町会長は述べた。こうして聞くと、あたかも話し合いに価値があったかのように思えてくる。そういう意味では町会長も、適材適所なのかも知れない。ひとみは、職場にもこういう人間が一人いたことを思い出した。高校の委員会にもいたし、大学のサークルにもいた。

町会長の言葉を受けて、なんのことやら分からない拍手が巻き起こった。

「いやいや。どうもこりゃ。ええ。ありがとうございます。それではですね、お時間もそろそろといった感じでございますので、今日のところはこの辺でお開きということに」

「あの、ちょっと」

ひとみは手を挙げた。

「なに」

町会長は急に愛想を悪くする。しかし、ひるむわけにはいかない。

「あの」

「だからなに」

彼は露骨にいらついた態度を見せた。たぶん疲れたから、もう帰りたいのだろう。どうしようもなく身勝手な人間だとひとみは思う。その顔からは、わざと忘れたふりをしているのか、それとも本当に忘れているのかは分からなかった。

気がつけば、周囲からも迷惑そうな視線がひとみに向けられていた。もちろん、最後に話すという約束を憶えている人も、何人かはいるだろう。けれどもう、今はそういう「空気」ではないのだ。誰もがさっさと帰りたい。空気を読め、という圧迫感が、ひとみを抑えつけようとしていた。そうした雰囲気に押されて、津久見さんも陽の母も、諦めてしまったようだった。ひとみは急に、心細くなる。

町会長の無駄話の間、どうやったらうまく話したいことを伝えられるか

を、ひとみはずっと考えていた。もしこうなったらこう、こう反論されたらこうと、いろいろ考えていた。しかしここへ来てふと気づけば、ひとみはそれらを、全て忘れてしまっていた。頭が真っ白になっていた。徐々に顔が、紅潮していく。

学校でこどもたち相手に教えるときとは全く違う、いやらしい緊張感を、場内全体から感じた。切迫した義務感と傲慢な圧力に、ひとみは挟まれていた。それらのせいで、計算ずくの言葉は消し飛んでしまった。

結局後に残ったのは、言わなければならないことだけだった。

「あの」

――目を瞑っていれば楽だが。

――そういうわけにはいかないのだ。

ひとみはゆっくりと、話し始める。

「こどもたちが、祭りの時から様子がおかしかったんです」

「最初に私が気づいたのは、崇嗣君のことでした。その、彼がいくら話しても、私には声が全く聞こえない。私が話しても、声が全然届かないんです。理由は分かりません。でも、それは霧が出始めたのと同じ時でした」

「それからだんだん、何もかもおかしくなっていったんです」

「テレビもラジオもおかしくなって、電話も通じなくなって、外から船も来なくなって、霧で何も見えなくなって、島中にねこがうろうろして」

「その後私が確かめたら、他のこどもたちもみんな、声が聞こえなくなっていました」

「なによりおかしいのは、誰もこのことを、おかしいと言わないことです」

「こどもたちはこどもたちだけで集まって、何とかしようとしています。でも、どうにも出来ません」

「私も、あの子たちになにもしてやれませんでした」

「たぶん私達にも、何も出来ないと思います。けど、せめて今おかしくなっているんだ、ということだけは、分かってやってください」

「何かをしてやる必要はないと思うし、こどもたちも、そこまでは期待していないと思います」

「ただ、こどもたちのせいにしないでください」

ぽつりぽつりとこのようなことを、思い出すままにひとみは話した。自分でも何と言って話しているのか、よく分かっていなかった。

気づけば、人々はぽかんと口を開けて、ひとみを見つめていた。

こんなに恥ずかしい気持ちになったのは、初めてだった。

――馬鹿みたいだ。

恥ずかしくて、惨めで、ひとみは少し泣いていた。人前で、しかも小さい頃から見知った人たちの目の前で、大きな声でこんな、一見意味の通らない正義漢ぶったことを、長々と喋るなんて。座り込みたくなった。

――しかし、なぜ恥ずかしいのだろう。

――当たり前のことを言っているだけなのに。

――言うべきことを、言っているだけなのに。

「ひとみッ」

びくりと身が引き締まるのを感じた。顔を上げると、前の方で半ば隠れるようにして座っていたひとみの父が、顔を真っ赤にしてこちらへ向かってくるところだった。彼がいることに、ひとみは全く気づいていなかった。

「何を訳の分からんことを。お前、やめなさい、この。女が偉そうに。何様のつもりだ」

やってきた父は、ひとみの腕を力任せにつかんだ。痛がるひとみが声を上げると、父は一瞬怯えたような目をしたが、すぐに引っ張って、ひとみを外へ連れ出そうとした。

恐らく父は、人前で恥知らずにも自分の娘が演説をぶったことがどうしようもなく腹立たしく、そして娘の話の内容が何一つ自分に理解できなかったことがその怒りに油を注いでいるのだろう。司会であるはずの町会長は、ひとみの話の途中から目を丸くしたまま、全く動こうともしなかった。

ひとみの足下にいる人々は、何故だか皆怯えて左右へと分かれていく。果たして激怒した父を怖れているのか、それとも訳の分からないことをまくしたてた自分を気味悪がっているのか、ひとみにはよく、分からなかった。

ずるずると引きずられながら、ひとみは、自分はこれでやるべきことをやったのだろうか、と考えた。

――馬鹿みたいだ。

「珠川さん、ちょっとよろしいかな」

よく通る声が聞こえた。どこかとぼけたような、落着いた声だった。その声を聞いて、ひとみの父は水を差されたように立ち止まった。

水垣先生は、座ったまま父に話しかけた。

「まだちょっと言いたいことがある人がおるようですから、もう少しお待ちいただけませんか」

体面を人一倍気にするひとみの父は、ひとたび怒りを冷まされればもう人目も気にせず進むことは出来なかった。ああ、うん、などと呟きながら、苦い顔をして彼は戸の近くに座り直す。ひとみも、腕を引かれるまま強引に座らされた。

その様子を見た先生は、ひとみに向かって笑みを浮かべながらこう言った。

「ちょっと、話が唐突だったかな」

ひとみは顔を赤らめた。

衆目が集まっても先生は物怖じせず、あくまでものんびりした動作で軽く腰を上げると、どこかへ向かって声を掛けた。

「岩倉、宗像、お前たちは話さなくていいのか」

すると、その言葉を聞いて、まずのそりと脩一が立ち上がった。続いて自信なさげに、周りの様子をうかがいながら、恐る恐る春文が腰を上げる。

「ええと」

一見すると億劫そうにすら見える脩一は、しかし落着いて順を追って、ぶっきらぼうな物腰のまま、話を始めた。

「さっきひとみが言ったように、こどもたちの様子がおかしいんです。おとなが話しかけても何も聞こえないし、向こうから何を話してもこちらには聞こえません。俺も実際さっき見ました。演技とかじゃありませんでした。原因も理由も、俺には分かりませんけど」

一息置いて、脩一は周りを見る。

「あの、霧はまだいいとして、テレビとか、電話とか、本当どうでもいい

ですよね。陽も、昨日だか一昨日だか変だったらしいし、津久見さんとこの娘さんも、さっき聞いたような話だし。普段そういうことするような子らじゃないでしょう。神主さん、崇嗣も、おかしくなかったですか？　健太は、気づいてなかったのかも知れませんけど」

言葉に迷うのか、脩一は少し黙った。そして、言う。

「どうして、見逃したんですか」

ひとみには、彼が今何を感じているか、よく分かった。こんな場所で大真面目に何かを語ると、どう言葉を選んでも、テレビドラマの安っぽい熱血漢のようになってしまって、恥ずかしいのだ。自分たちが冷めた人間だというだけのことなのかも知れないけれど、どうにも空回りしているような気持ちになって、仕方なかった。

こんな恥ずかしさのせいで、多くの言うべきことは失われていくのかも知れないな、とひとみは思った。

けれど分かってもらうには、こうして話すしかない。

「正直そんなこと、他の大部分の人は、みんな興味ないと思います。自分のとこにこどもいなかったら関係ないだろうし。俺もまあ、ひとみに言われなかったら気づかなかったと思います」

ひとみも、たまさか自分が教師だったから気づいただけだろう、と自分自身で思った。そんなものだ。気づけない人々が悪いわけではない。

「でも、たぶん今一番大事なのはこの、こどもたちのことなんだと、思います」

少しだけうつむきながら、脩一は最後にこう言った。

「とりあえずこれをなんとかしないと、霧も、他のいろんな事も、終わらないと思います」

こんな長い話をする脩一を、ひとみは初めて見た。言葉の一つ一つは短く、突き刺さるようだった。脩一も、事の次第を正確に理解したのは、集会場の前でさっきひとみが説明したときだろう。短い話だったし、充分に言い尽くせたとはひとみも思っていない。けれど、そんな脩一の言は、誰よりも的を射ていた。

要は、理解しようとする意志があるかどうかなのだろう。

「え、いや、俺は」一方、春文はまだびくついている。「別にその」

春文が黙ると、場は静まりかえる。
「俺も」春文は何とか続けた。「俺も、見ま、した。そんな感じ、でした」
また、静かになる。
「んー」
すると町会長が、何を思うのか媚びた笑いを浮かべた。ひとみは厭な予感がした。
「ちょっと、んー、おじさんには分からないなぁ。もうちょっと分かりやすく話してくれると、助かるんだけどねぇ」
なぜこの期に及んで自分たちがこども扱いされるのだろう、とひとみは思う。
「だから、言ったとおりです」
座ったまま、ひとみは少し声を高くして言った。即座に横の父親が、お前は黙ってろ、と怒鳴る。町会長は、しきりにこう繰り返した。
「んー」そして、あたかも理解力に満ちた者であるかのように振る舞った。
「んー、ほら、君たちもさあ、ね、疲れてるんだよ。うん。きっと本土の方で、いろいろあったんだろうけども」
「俺はずっとこっちですけど」脩一は呟いた。
「だからまあ、君らくらいの年頃だと、いろいろ悩むことも多いだろうし」
「私達もう、思春期じゃありませんから」
「お前いい加減にしろ。これ以上親に恥かかすな」
「思春期とかじゃなくてもね、若いうちっていうのは、そういうもんなんだよ。私だってそうだった。いずれ何とかなるものだ」
「町会長さんと私は違います」
「お前。そんな。女が人前で生意気な口」
「うんまあそうだね、違うね。でもさ、人間誰でも悩みを抱えているものでね」
「話がずれてる」
「脩一君。おとなにそういう言い方するのはよくない。あー、君ももういい歳だったなあ」
「だから、こどもたちのことを、真剣に考えてください」
「こら、ひとみっ」

「私はいつでも真剣ですよぅ。だからね、もっと落着いてから話をしよう。ね」
「俺らは初めから落着いてます。いい加減なのも浮ついてるのも、あんただろ」
「言っていいことと悪いことがあるよ、脩一君」
「いいかどうかは言ってみないと分からないじゃないですか」
「脩一ぃ、やめとけってお前もうさあ」
「そうだよ春文君。止めてやってよ。親友だろ？　こういうこと一緒にやってると、君のおじいさんが泣くよ」
「大先生なら絶対に私達の味方をしてくれます。春文ももっとしゃきっとしなさいよ」
「んなこと言ったって」
「さあさあさあ。もう終わり終わり。訳分からないことといつまでも言わない」
「なんですか、その言い方」
「はいひとみちゃんも。一旦帰って、頭冷やして、それからゆっくり話し合おう。ここでいつまでも喋ってると、他の人たちに迷惑だ」
「ちょっと待ってください、まだちゃんと言えてないんです」
「まだ言い足りないか。え？」
「ちゃんと私の話を聞いてください」
「聞いてるの。聞いたからこうやって困ってるの。そんなこどもたちだけ、声がどうのなんて、普通に考えてね、そんなのありっこないの」
「あるんです」
「ないの。ないない。おしまい。後のことはみんな私らが考える。君たちはさっさと帰って、ゆっくり休みなさい」
「話を聞いて」
「ほれひとみッ、もう帰るぞ」
「ひとみちゃんも、脩一君も、それから春文君もね。もう三人ともいいおとななんだから。無茶苦茶言って人を困らせるのはやめなさい。ちゃんと我々考えてるんだから。ちゃんと、これから、どうするか」
「それで」

水垣先生が言った。
「どうしたいんですかな」
すべての雑多な言葉が止まった。静かになる。途端に町会長は卑屈な顔になった。
「どう、と、おっしゃいますと、先生」
「だから、どうしたいんですかな。あなた、町会長さんも。珠川も、岩倉も、宗像も。そこのところがまだ、はっきりしない」
戸の間際で父親に腕を掴まれたまま、ひとみは先生の話を聞いていた。
「珠川にはさっきも訊いたな。どうしたい？　ちゃんと、はっきり言いなさい」
ひとみは父親の腕を振り払った。振り払われた後、父親の腕が力なく垂れるのを見た。水垣先生は、なおも言う。
「僕は、先ほどここへ入る前の彼女たちからの伝聞でしか、こどもたちの様子を知りません。だから、実際どうなっているのかは分かりません。まあ、何かが起こっていてもおかしくはないと思ってはいましたけれども。そして実際、今のこの状態は明らかに、平時ではないです。ここはもう」
開いた戸から、先生は霧に満ちた外を見る。「異界ですな」
つられて多くの人々が、戸口の外を見遣った。町会長は苦笑した。
「イカイって先生」
「もう何かが、変わってしまっておるんです」町会長の言葉をはじくように、先生は話し続ける。「だからこそ、僕は彼女の言葉を信じた。普通は、とか常識的に考える、なんてことは、もう力を失っておるのです。あなただって、薄々感じているでしょう。もう変わってしまったのです。変わってしまった以上、以前の普通だの常識だのの考え方に固執していても、得られるものは何もありません。それは頑迷な懐古に過ぎんのですわ。変わったら、変わったなりの考え方がある」
「新しければよい、というものではないでしょう、先生」
口を尖らせた不満顔の町会長は、ひどく見苦しかった。
「その通りですな。考え方を変えれば、それで結構というわけにはいかない」
水垣先生は微かに笑った。

「問題は、考え方を変えた上で、どうするか、です。それで僕は訊いたんですよ」
再びひとみに向かって、先生はゆっくりと問うた。
「どう、したい」
最早町会長など、二人の眼中になかった。
ひとみは、落着いて考える。
――どうするべきかではなく、どうしたいか。
そして、ひとみは再び立ち上がった。父はもう、いじけたようにして何も言わなかった。
話す。
「とにかく、おかしいんです。だから」
口の開いた人々の顔とその視線が、ひとみに集まる。
「少しでも多くの人に、そのことを分かっておいてもらいたいんです」
ひとみは、人々を見る。
神主は、神職としての重みをすっかり失い、悲しげにやつれ、すがる表情をしていて、それがまた哀れだった。弥生の父は、眉間にしわを寄せ、不安の眼差しでひとみを見上げている。健太の母は、未だに息子と関わりあることとは思えない様子で、ただ自分の知る範囲の中で考えて、混乱しているようだった。陽の母は真剣な、しかしどこか寂しげな面持ちで、ひとみの話を聞いていた。
そして、脩一と春文は逃げ出さず、立ったままでいる。それだけでも、ひとみは嬉しかった。
もう一度、ひとみは頭から順を追って話を始めた。
話せば、何か変わるかも知れないという、それだけの甘い期待だった。

先生の言葉が、耳に残る。
――ここはもう、異界ですな。
ひとみはふと、戸の外を見た。
霧は、一層深まっていた。
どこからか、ねこの鳴き声が聞こえる。

10.

もう、話すことはなかった。

ひとみ先生たちが帰って、もう一時間以上経つだろうか。最後の陽の言葉から後、誰も、何も言わなかった。もちろん、これからどうすればいいか、分からないということではない。

考えたくないだけだ。

家は、静かだった。

ぼくら五人は、居間で何もせず座ったまま、ただ過ごしている。

無駄だと思ったので、電気も消した。

部屋は一面、灰色になった。

ぼくは立ち上がると、机の上に置きっぱなしになっていた朝食の食器を重ねた。かたかたという音が、異常に寂しく響いた。すると弥生ちゃんが、言った。

「私、やるね」

「いいよ」

ぼくは首を振る。せっかく見つけたやるべきことを、渡してしまっては意味がない。

「ううん、気にしないで」

まるで自分がやらなければならない仕事のように、弥生ちゃんは率先して食器を集め始めた。たちまち台所へ行ってしまう。

仕方なく、ぼくは居間へ戻った。廊下から部屋の中をのぞくと、外に面した窓ガラスから真っ白な霧が見えた。部屋の中に座り寝そべる三人はその霧に照らされ灰色に、そしてその影は、短く黒くゆらゆらと畳に続いている。まだ朝の九時半だというのに。

陽がのっそりと立ち上がり、廊下へ出ようとした。

「どうしたの」

ぼくは曖昧な不安に駆られながら訊く。

「いや」うつむき加減に陽は応える。「何か、読むものないかと思って。

なんでもいいんだけど」
「あ、うん」そう聞いて、少し安心する。「お父さんのでよければ」
ぼくと陽は廊下に出る。ちょうどその時台所から出てきた弥生ちゃんが、ぼくらのことを遠目に不思議な目付きで見ていた。ぼくの視線に気づくと、弥生ちゃんはふっとすぐによそを向いて、居間へと戻っていった。
ぼくは、お父さんの書斎のドアを開けた。やっぱり埃臭い。おばあちゃんがこの部屋の本の山を崩したのは祭りの三日前だから、ここに入るのも、もう五日ぶりになる。部屋の中は、あの時適当に整えたままになっていた。
陽は、机の上に載ったお父さんの資料やメモ書きを見ている。
「ここ、入るの初めて？」
ぼくは尋ねた。うん、と胡乱な声が返ってくる。
壁には本棚が隙間なく並んでいて、床にも本や書類が積み上がっているから、人が居られるのはせいぜい二畳くらいだ。床は木張りで、本棚と本棚の合間にほんの小さな、採光と換気のためだけの窓がある。
本棚には、分厚い専門書とファイルばかりが並んでいる。お父さんが資料にするため、あちこちで撮ってきた写真のアルバムもあった。
『地形民俗学概論』
『富士の伝承』
『祭神と神事』
『ウチとしての島』
『火の文化』
ぼくが並ぶ背表紙をぼんやりと眺めていると、陽が一冊を手に取って冗談ぽく言った。
「これは健太に読ませないと」
見てみると、『供物及び神酒に関する諸考察』という本で、日焼けもひどく、ぽつぽつと茶色いしみまであった。活字や装丁も、恐ろしく古い。触れれば崩れていきそうだった。
「絶対読まない」本を受け取って眺めながら、ぼくは言った。
「間違いない」
陽は声に出さずに、くすくすと笑った。肩を揺らすだけの控えめな、陽のいつもの笑い方だ。ぼくは、少し気が緩むのを感じた。陽は本を、元の

場所へと戻した。
狭い部屋の中、久しぶりに心が落ち着いた。間近に陽の暖かみがあり、匂いがある。長い間誰も入らなかったこの部屋の中では、それがいっそうはっきりと感じられて、それがぼくにとっての幸いだった。ぼくは、ゆっくりと息をついた。
机の上の本に、陽が目をとめた。
『稚児、そして巫女』
白い、時間を経て黄ばんだ表紙に、題が控えめな文字で書いてあった。陽はそれを、じっと見ている。ぼくは、その陽の顔を見る。
最後にこの部屋を出たとき、お父さんが残した本だろうか。
お父さんはその日、朝早くに家を出た。その前の日まで、何を思っていたのだろう。
何を考えていたのだろう。
陽がその本を手に取って開くと、ぱりぱりと糊の剥がれるような音がした。陽に顔を寄せて、ぼくものぞき込む。中には、古い本特有の薄くにじんだ小さな活字が、虫のように連なっていた。陽の目はその字を追っている。
陽はぱんと本を閉じると言った。
「じゃあ、これ借り、うわ」
振り向きざま、ぼくの頬に陽の頬が触れた。陽は驚いてのけぞり、軽くよろめく。そしてそのまま、本棚にぶつかった。ぼくは目を丸くした。
「大丈夫？」
「近いよ」
気まずそうに陽は呟く。頬もうっすらと、赤く染まっていた。そんなに驚かなくてもいいのに、と思った。
そして陽は、さっきの拍子に倒れたり落ちたりした本がないかと本棚を見ていた。すると棚の一つに、並ぶ本を両脇に寄せて作った空間があると陽は気づいたようだった。ちょうど椅子に座ると、顔の辺りに来る高さだ。そこに木のフレームの、薄く埃がかった写真立てが倒してある。陽はすと無意識のように手を伸ばし、それを表に返した。
写真は、お母さんのものだ。

まだ若い頃のものだ。と言っても、お母さんが亡くなったのは二十一歳の時だから、それほど古いものでもない。お父さんは三十七歳だった。一緒に船に乗って、沈んだ。

それは、お母さんが浜辺を歩いている写真だった。長い髪は少し風を受けている。たぶん結婚前に撮ったものだから、せいぜい一六、七のときだろう。

じゃあ、今のぼくと同じじゃないか。

お母さんの肩越しに、延々と続く岩場、隅には大きな岩や洞窟も写っている。朝早いのか夕方なのかは分からないけれど、綺麗な日が水平線のすぐ上に浮かんでいた。

振り返るお母さんは、笑っていた。

今見るぼくにとっては、突き刺さるような優しい笑顔だった。

死んだ人が微笑んでいるというだけで、どれほど苦しいことか。

「齋夜にそっくりだ」

いつの間にかぼくはまた、陽のすぐそばで寄り添うように、一緒になって写真を眺めていた。陽の言葉に、ぼくは少し眼を上げた。

「そう？」

「うん。すごく」

尋ねはしたけれど、ぼくは知っている。ぼくはお母さんにそっくりだ。少なくとも顔は、よく似ている。雰囲気も性格も似ている、とおばあちゃんがずっと前、言っていた。

なぜだろう。

ぼくは、上目遣いに陽の顔を見ている。

陽も、ぼくの顔を見ている。

じっと見ている。

そのまま少し時間が経った。

ぼくは急いで言った。

「他にも写真、あるよ」

ぼくは、隣の本棚に置いてあるアルバムを取った。陽は名残惜しそうに

お母さんの写真を見つめた後、それを元のように伏せて戻した。ぼくの方へ静かに近寄り、ぼくの肩越しにアルバムをのぞき込む。
ぼくはいろんな気持ちをごまかすように、急いでアルバムのページを繰った。けれど、間違えたようだった。それは家族のアルバムでなく、お父さんの撮った、あちこちの森や神社の写真ばかりだ。旅先のものが多いけれど、いくつかこの島の光景も挟まっていた。ぱらぱらとめくる。
突然、陽がぼくの手を押さえて止めた。
「なに？」
ぼくは尋ねる。陽は目を細めて、写真に見入っている。
森の中の、あの広場の写真だった。
根生え苔匍う広々とした、深い茶色の土の場所の中、その真ん中に石のベンチが、孤独に置かれている。それを囲むように、真っ直ぐに伸びた樹が六本立っている。暗く、緑の光が満ちている。
美しかった。
今と何も変わらない。
陽は、じっと見つめている。
ぼくは、不安に駆られる。
何を考えているのだろう。
陽の顔は、窓から射し込む霧の光で陰になり、表情はうかがえなかった。
何を、考えているのだろう。
アルバムを閉じようとするぼくの腕を、陽は押さえて放さない。
ぼくは、不安に駆られる。
再び、ぼくはその写真に眼を落とす。
樹が立ち並んでいる。
静かで涼しく、湿った土を、音も立てずに踏みしめ歩き、
鳥と虫の声に包まれ、そのベンチに腰掛ければ、見たその先、樹の陰から、

白い、こどもが、

「戻ろう」

陽はアルバムをぼくの手から取り、ぱさりと音を立ててあっさりと閉じた。
アルバムを元に戻す陽をぼくは、静かに混乱しながら見ていた。
どうしたのだろう。何を考えているのだろう。
どうしよう。
内心強く動揺しながら、ぼくは何も言えないままでいた。
陽は、ゆっくり振り向いた。口元に浮かんでいる笑みは優しい。
そして言った。
「齋夜の写真も撮らないと」
もうここ何年も、ぼくの写真なんか撮ってないな、とぼくは思った。
「今度撮ろう」
陽は楽しげに言った。
ぼくはうつむいたまま、小さく頷いた。

「長かったな」
「そう？」
戻るなり健太が言い、陽が軽く応じた。そのまま陽は壁際に腰を下ろし、もたれてさっきの本を開く。ぼくは敷居の上に立ち、部屋の中を眺めていた。
弥生ちゃんは崇嗣の顔のバンドエイドを取り替え、消毒をしてやっていた。正座し、膝の脇に緑色の薬箱を開けたままにしている。崇嗣の方は顔中にしわを寄せて痛がっていたが、昨日のように声を上げることはなかった。
所在なく立ったままでいた健太は、痛めた肩を少し気にしているようで、何度か小さく上下に動かしていた。その度に眉をしかめる。けれどふいに、思い立ったように外に向いた窓へ向かった。
健太は問う。
「開けていいか？」
誰の答も聞かないまま、健太は窓を、大きく開け放った。
真っ白だった曇りガラスが開かれると、瞬間的に霧が部屋の中へなだれ

込んだ。すう、と冷たい空気が、敷居に立ったままのぼくの、首や腕を撫でる。夏なのだから、窓を開けたくらいでは大して変わらないと思っていたのに、それはひどく心地よかった。

いつの間にこの部屋は、こんなに息苦しくなっていたのだろうか。

古い家なのであちこちに隙間があり、他の窓を開けなくても、風はどこからか抜けていく。ひょうひょうとぼくの背後から、細く風音が聞こえてきた。

霧は際限なく、部屋の中へと入り込んでくる。

じわりじわりと広がり、健太を包む。

壁際で本を読む、陽を包む。

座り込んだ弥生ちゃんと、崇嗣を包む。

誰も、何も言わない。

何も言わない。

「もう、いいでしょ」

足早に部屋の中に入ると、ぼくは急いで窓を閉めた。

「部屋の中がしけっちゃう。木の家なんだから」

ああ、ごめん、と健太は、思い出したようにぼくに向かって言った。

いや、それでもなお、健太は窓の外を、霧を、眺めていたかも知れない。

まるで何かに憧れるように。

何となく、ぼくは顔を背けた。背けた先には、木の机があった。すべすべとした表面が、たったあれだけの間だったのにうっすらと湿っていた。水の粒が浮き上がるようにして、一面を覆っている。ぼくが近づいて、人差し指で撫でてみると、なぞった跡が線になった。

いきなり弥生ちゃんが、薬箱を閉じて立ち上がる。

「私、布巾取ってくるね」

そして、そのまま薬箱を持って行ってしまう。ぼくが口を挟む暇もなかった。

なんだか、つまらない。

傷もおおかた癒え、顔に残るバンドエイドも鼻と頬に一枚ずつになった崇嗣が、ふと立ち上がった。何かと思って見ていると、畳のすじに沿って足を滑らせて遊んでいる。湿っているときこうすると、つるつるした足の

感覚が面白いのだ。崇嗣は小さい頃からいつも、こういうどうでもいいことばかりにすぐ気づいては、喜んでいるのだ。ぼくも、少し笑った。

でも、崇嗣はそれを直にやめ、座った。

座布団の上にあぐらを掻くと、崇嗣は机の上に片肘をついて、黙ってむっつりとしていた。考え事でもしているのだろうか。

らしくない。似合わない。

健太は立ったまま、まだ窓の外を見続けている。どうせ何も見えないのに、飽きもせず諦めもせず、先を見ようとしているのだろうか。

なんでだ。

弥生ちゃんが、いそいそと戻ってきた。薬箱を戸棚に戻してきたようで、布巾はそのついでに取ってきたらしい。大きな机を乾いた布巾で念入りに、かいがいしく拭いている。

やらなくてもいいのに。

陽は何も言わず、ずっと本を読んでいた。一度も顔を上げず、読書に埋没している。その顔は、全くの無表情だった。

何を考えているのだろう。

ひとりひとりの様子を見ながら、ぼくはゆっくりと部屋を横切った。畳についた水滴が、足の裏にまとわりつく。気持ち悪い。そして再び、部屋と廊下の間の敷居の上へと戻った。敷居は少なくとも乾いていたからだ。だからといって廊下に出るのも、なんだか厭だった。

振り返り、ぼくはもう一度、四人の姿を見る。

窓から差し込む霧の光で、よく見えなかった。

なんだか、厭だった。

ぼくは怖かったのだ。

あの森は、今どうなっているのか。

あの子は、まだいるのか。

書斎を出てから、それを陽に訊かれるのが、怖かった。

あの写真を見た陽が思い出して、

自分が島を出た後、あの場所はどうなったのか、

今にそう一言、ふいと訊かれると思って、ぼくは怯えていたのだ。

けれど、陽は訊かなかった。
なぜだろう。
そしてなにより、
あの子が、
ぼくは怖い。
怖い。

霧に巻かれた森の中、あの子はきっとまだ、一人で待っている。

あの子は、すべてを終わらせるのだ。

「あ」
健太が、言った。
ぼくは、ゆっくりと視線を動かす。健太は窓際で腕組みをして、まだじっと立っていた。外を見つめている。
「どう、したの？」
影になった弥生ちゃんが尋ねる。健太は、すぐには応えない。
「あれ」
「なんだ？」
崇嗣も腰を上げる。
陽は動かない。
健太はもう一度、言った。
「誰だ？　家の前の道、歩いてる。ほら、そこ」

「神社に向かって」

ぼくは、窓に駆け寄った。
崇嗣も弥生ちゃんも、窓にくっついて外を見つめている。ぼくも同じようにする。けれど、何も見えない。見えてこない。
「ほら、家の前。立ち止まってるのかな」
健太はそう言うけれど、ぼくには何も見えない。ぼくは窓に張り付いて、

目を凝らした。
「あれ？　あれがそう？」弥生ちゃんも言い出す。「あの、赤っぽい服の」
「右に白い服の、なんか、太った人いねえ？」崇嗣は言う。「なんだよ、
齋夜。そんな必死で見るほどのもんじゃ」
あれは誰だ。あれは、たぶん、
町会長？
それと、
陽のお兄さん？
二人とも喋っている。うちの前にいる。
霧の中、ぼんやりと姿が揺らいでいる。
そして、二人ともうちに背を向け、
神社へ向かって、歩き出した。
ぼくは、血の気が引くのを感じた。
あの二人は、あの二人は、
森を。
止めないと。
「ゆうちゃん？」
どうしよう、
急いで、
急いで先に行かないと、
ぼくが、
「おい齋夜？」
ああ、このままだと、
「なあ、齋夜？」
そうだ、きっと、
あの二人は、
言っていた、
森を、

森が、
森が失われたら、

森が失われたらぼくは、

「齋夜ッ」

森が失われたらあの子が見つかってしまう。

ぼくはそのまま周りを見ず誰の言葉も聞かず駆け出すと、廊下を抜け、玄関の扉を開き、そして、霧の中へと飛び込んだ。

何も、見えなかった。

11.

ひとみの話が終わってから、集会場に集まったおとなたちは、おおよそ三つの立場に分かれていた。

まず第一に、ひとみの話を全面的に信用する、とした人たちがいた。本気で信じる人もいれば、ひとみの言うことだから、と言って納得してくれた人もいる。

次に、ひとみの言を何一つ信じようとしない人々で、これは町会長やひとみの父を始め、ごく少数だった。この、何もかもを否定する、という人の数は、ひとみが思っていたよりもずっと少なかった。感情的にならないと、ここまでには至らないからだろう。しかし、この二者を加えても、全体の三分の一にすら届かなかった。

そして残りの大多数は、よく分からない、と言った。

「なんだろうねぇ、ちょっと、分からんねぇ」

「そういうことも、あるんかねぇ」

「聞いたこともないけども」

「何とも言えんわねぇ」

彼らは万事、こんな調子だった。そしてそこから先、何も考えを進めてくれる様子はなかった。

そんな気のない言葉を聞く度、ひとみはどうにもじれったくなった。まだしも反対側についてもらった方が、楽なぐらいだった。あちらになびき、

こちらになびく、半端な反応しか返ってこないのでは、ひとみとしても説得のしようがない。
　もちろん、どうしようもなく頑固な拒絶派にもうんざりしていた。
「ひとみちゃん。だからさぁ、そういうことはね、科学的に考えても、ありえないんだって。分かる？」
　さっきから徹底してひとみを小馬鹿にした口調で話しかけてくるのは、やはり町会長だった。ひとみはストレスでどうかしてしまったのであり、自分はそれを助ける善人なのだ、という考えから、どうしても離れたくないようで、むしろ今のこの状況を、一種の快感にすら思い始めているようだった。
「お祭りでどうの、とか言うけども。私はね、ひとみちゃんよりもずっと長いこと、この島で暮らしてきた。お祭りだって何度も何度も見てきたよ。でも一度だってそんな、お祭りでこどもたちが？　そうやっておかしくなるなんてことは」
「おかしくなったなんて言ってません」
　ひとみが口を挟むと、蠅でも追うように手を振りながら、彼は頷いた。
「うん、まあそうだね。でね、ひとみちゃん。そんなことはさ、未だかつてなかったわけだから。常識的に考えてもそうでしょ。霧は霧。天気がどう変わったって、そうそうそんな変なことは起こらないの。分かる？」
　そうしてひたすら常識に固執する町会長は、話しながらもずっと、正面からひとみに目を合わせてきていた。彼の眼は、なんだか知らないが茶色にどんよりと濁っていた。ひとみは目を逸らした。
　逸らした先には、ひとみの父が顔を真っ赤にして立っていた。
「ひとみッ」もう声も枯れていた。「お前はまた、おとなをからかうなっ。この」
　そんなこんなで、いつまで経っても、話は一向に進まなかった。
　脩一も、何とかしようと彼なりの努力はしてくれてはいるのだが、なにしろ元が口下手だから、そううまくはいかない。春文に至っては、何かを尋ねられても口ごもるばかりだった。いずれにしても、どれほど精魂込めて話したところで、実際に見ていない人たちは、しかも分かろうという気が端からない人たちは、決して分かってはくれないのだ。

だからといって、このおじさんおばさんたちをぞろぞろと引き連れて齋夜の家へ行く、などということは、もちろん絶対に出来なかった。もし一言でもそんなことを口にしたが最後、連れて行く羽目になりかねないので、ひとみは最初からずっと慎重に、言葉を選び続けていた。

しかしそうなると、次第次第にひとみの側も話すことが尽きてくる。

手詰まりだった。

一方で、この状況に厭いてきた島の人々は、すでに得手勝手に話し始めていた。気のないだらだらとした声が、部屋の中を頻りに飛び交っていた。

本当だろうかね、と言う声。

水垣先生が言っとるんだからそうなんじゃないか、と言う声。

でも町会長さんはああ言っとるよ、と言う声。

そんなこと言われたって、私らにどうしろっていうんだろうね、と言う声。

どう思うどう思う、としきりに周りへ意見を求める声、若い子の言うことはわしにはよく分からん、と言う声。中には、露骨にひとみを疑い、悪口を叩く声もあった。

ひとみが一人懸命に考えを巡らせていると、どこからかふいに、話しかける声があった。

「ひとみちゃん、話はまあ大体分かったから、帰ってもいいかね」

「え」ひとみは、何も返せなかった。

そして、ひとみの父やそれより年長の男たちは、最前からひとみのそばで、ぼそぼそとこんな話をしていた。

「妙な、面倒なことをぐちゃぐちゃと言うもんだ」

「だからああいう女を大学なんぞに行かすと、無駄に理屈っぽくなって、訳の分からんことをぬかしだす」

「世間の常識、ちうもんを知らん」

「あの子の言っとることはよく分からんが、どこぞで聞いたか、習ったかしたものだろう?」

「理屈で世の中回ったら楽なもんだ」

「こどもらなんぞ、あんなもん殴って言うこと聞かせときゃあいいんだ」

「それが、本当にこどもを教育する、っちゅうもんだろ」

「大事大事に育てるから、おとなの言うこと聞かんようになるんだろ」
「そいでおとなを馬鹿にして、なんだ、耳が聞こえんふりをすると」
「馬鹿にするにも程がある」
「俺なんかお前、中学出るか出んかのうちに立派に働いとったぞ」
「それを贅沢な」
「珠川さんよ、お宅の娘さんも、小さい頃は素直で、気だてがよくて、ええ子だったんだけどなぁ」
「いやあ、お恥ずかしい限りですわ」
「もうさっさといい縁談の口見つけて、嫁に行かせた方がほれ、いいんじゃないか」
「それが、あの子のためだ」
「ああ、それならもう」
――なんの話をしているんだ。
次第にひとみは、しゃがみ込みたくなってきた。けれど何を間違っても、そんなことは出来なかった。
――だったら自分は、これから、何をすればよいのだろうか。
「なんの話を、しておられるんですかな」
そんなことを言いながら水垣先生は、いつもどおりの柔和な笑みを浮かべて、先のぼそぼそと話を続ける拒絶派の狭い輪の中へと、臆することなく入り込んでいった。
入ってこられた側は、曖昧な作り笑いを素早く顔に貼り付け、え、いやあ、なに、へへ、と同じようなことを、各人が呟くばかりになった。そうして誰も、何も応えない。この手のごまかしの術には、皆が長けている様子だった。
ふむ、と鼻から息を漏らした先生は、おもむろに顔を上げて、ひとみに言った。
「どうした？」
「どうって」
ひとみは返事に窮した。自分の力不足で理解してもらえないのを、他人のせいにして愚痴る気にはなれなかった。そんなひとみを見て、先生は笑う。

「自分が話し下手だから分かってもらえない、とか考えているでしょう」
ひとみは、何も言えなかった。
「そうやって簡単に自分を卑下するのは、最近の珠川のよくない癖だよ。大丈夫。よく説明できていた。少なくとも、僕はによく分かった」
「でも」
ひとみが言い返そうとすると、先生は再び笑った。
「分かってもらえない？　そりゃあそうだ」
そして先生は自嘲気味に、寂しくこう言った。
「こんなもんだよ」
もうひとみも、おそらくは水垣先生も、すでに周りの人たちのことなど見ていなかった。
「分かってもらうには話すしかないけれども、話したからと言って分かってもらえるとは限らない」
先生は一息にこう言い切ると、にっと笑って後を続けた。
「僕だって長いこと教師やってきて、まあ色々あったけども、そんな、そう簡単に分かってもらえたことなんかないな。この島に来る前、若い頃は、あっちこっち転々としていてね。こどもたちがこうなっています、大変なんです、と一生懸命上や周りの人に言ったものだけど。まず、誰も分かってはくれない。何も変わらない。それでね、大体五年か、下手すると十年くらい経ってから、ようやく世の中が動き出す。そういうもんだよ」
「じゃあ、なんのために」
すると先生は、一層面白そうな顔をした。
「なんのために？　君はそもそもなんのために、こんな面倒な役を買って出たの？　君はなんで、教師になったの？」
ひとみは黙り込んだ。
「僕らはね、出来るだけのことはするけど、それで世の中、どう変わるってものでもないな。いや、世の中は変わらない。だからおのずと限界がある。今の珠川はよくやった。充分だ。ほら見てごらん、同意してくれる人がこれだけいたのだから。上出来と言っていい。君は人に、こどもたちのことを伝えた。それで、僕らの仕事はおしまい」
うつむくひとみへ、座ったままのぞき込むように先生は尋ねた。

「虚しいかな？」
ひとみは何も言わない。
「でもそういうものだ」
集まった人々はすでに、関係のないことを自由に話し始めている。
――彼らにとって、もうあのことは、過ぎた話題なのだ。
「変わらなければならないのは、世の中ではない」先生は、静かに言った。
「悲しいけれど」
ひとみは何も言わない。
「君が次に出来るのは、誰に、何を？」
ひとみは、少しずつ顔を上げる。
「うん、いい顔だ」
水垣先生は言う。けれどひとみには、自分が悲しげな顔をしている気がしてならなかった。
これからも、いつまでも、自分は悲しい顔のまま、過ごすのだろうか。
あの心躍るこどもの笑顔は、もう自分は浮かべることが叶わないのか。
失われたのはなんだろう。
奪われたのはなんだろう。
せめてものこと、自分がその笑顔をかつて持っていたということを、忘れずにいようとひとみは思った。
ひとみは、言った。
「迎えに、行ってきます」
「うん」
先生は微笑んだ。
畳の上に敷き詰められるようにして座る人々の合間を、ひとみは抜けていく。目敏く気づいた町会長が、声を上げて問う。
「ちょっとひとみちゃん、どこ行くの」
「こどもたちのところへ。迎えに行きます」
ひとみが口早に応えると、幾人かの人々が顔を上げた。
脩一、春文と、あとは当のこどもの親たちだった。陽の母、神主、弥生の父、健太の母。そして、それだけだった。他の人々は皆よそを向き、好きに喋り続けていた。

「君一人で行くわけにもいかないでしょう。ね。私もついていってあげよう」

町会長もそう言って、心得顔で頷いた。しかしひとみはもう、それにいちいち反抗したりもしなかった。町会長の言葉を聞いたこどもの親たちも、ゆるゆると腰を上げる。それでいい。

――こどもを迎えに行くのは、親の役目なのだから。

ともすれば躓きそうになりながら、人と人との合間を、出口に向かってひとみは歩く。

そうしてひとみは、数時間ぶりに外へ出た。そして、思わず息を吸い込んだ。身体に霧が満ちた。どれほど集会場の空気が暑苦しく澱んでいたか、ここへ来て初めて分かった。

霧は美しい。先を見せないということが、いかに今の自分を救うことか。そんな白色の暗幕に、先の水垣先生の微笑みが映った。

いつからあの人は、あんな傷ついた笑みを浮かべていたのだろう。

年を経た優しさは常にやつれを含み、それが顔に浮かび出る。

誰に向けられた微笑みだったのだろう。

もちろんひとみと、

そして、こどもたちへだった。

自分もいつかきっと、ああして笑うだろう。

変わらなければならない悲しみを、少しでも慰められればいいと思った。

「道はこっちで大丈夫かなぁ、ねえ春文君」

「ああ、はい、たぶん」

誰も話さない間を埋めるのは自分だ、とでも思いこんでしまったのか、町会長はさっきからひっきりなしに無意味なことを口にしては、春文に話を振っていた。

そうこうするうちにようやく行き先を把握した町会長は今、ひとみより前に立って、あたかも先導するかのように歩いている。話しかけられる春文も、仕方がないのでその近くにいる。その後を少し離れてひとみと脩一が続き、更に親たちが、うっそりと連なっていた。

ひとみは隣をちらりと見る。脩一は当然のように気づき、目が合った。
「大丈夫？」
脩一が尋ねる。
「うん」
ひとみは小さく応えた。
「そう」
脩一は言い、そして数度瞬(まばた)いた。
「結婚するの？」
脩一は訊いた。
「うん」
ひとみは頷いた。
「そう」
脩一は前へ向き直った。
少しの間、二人は歩いた。
やがて、彼は言った。
「おめでとう」

どうして、自分は脩一を振ったのだろう。
いくら考えても、もう思い出せなかった。

さあもうすぐだ。ひとみは思う。もうすぐ齋夜の家だ。
前を行く二人、春文と町会長は、霧でかすむほど先を行っている。
なぜそうも急げるだろう。
終わらせたくないではないか。
――親が迎えに来ると、楽しい時間は終わってしまうのだから。
そう考えたときふと、
ひとみは、はっきりとしない厭な予感を覚えた。
やがて、前の二人は立ち止まった。左か右かで迷っている。
突き当たりを右に折れれば齋夜の家、左へ向かえば、神社の石段がある。
二人は間違えて、左に曲がろうとしていた。ひとみは苦笑した。
すると。

ガラス戸の開く音。
駆ける音。
霧の中に誰かの姿が現れる。
齋夜だ。

12.

何も見えない中を、ぼくは走り続けた。神社の石段へ向かう人影へと向かった。
気が遠くなるほど身体が熱い。走っているからではなく、混乱と恐怖のせいだった。
あの二人は、森をなくせばいいと、祭をなくせばいいと、そう言っていた。
もう頭の中は、そのことだけだった。
何をするつもりだ。
一度失われたものは、もう戻らないのに。
森をなくしてはならない。祭をなくしてはならない。
なくしてしまえば、そのとき、
すべてが終わる。
あの子が現れるのだ。
あの子が、
「齋夜ッ」
陽の鋭い声に驚いて前を見ると、白く大きくぶよぶよと膨らんだ背中があった。町会長だった。間に合わずそのままぶつかり、ぼくは地面に転がった。
走り寄る音が耳元に聞こえる。見上げると、ぼくを囲むようにして陽、健太、崇嗣、弥生ちゃんが立っていた。
「大丈夫か」
陽がゆっくりと、背中から支えてくれた。一瞬衝撃に呆けていたぼくは、しかしすぐに何をしていたか思い出して、陽を振り払うと立ち上がった。

間の抜けた顔をした町会長が、すぐそこに立っていた。汗染みが一面に広がった、気持ちの悪い白のシャツを着ている。腹の辺りは、ボタンが飛ぶ寸前まで布地が張っていた。ズボンは趣味の悪い泥色の綿パンを、ぎちぎちにベルトで閉めている。だらだらと汗の流れるのっぺりとした顔の中で、口は薄く開き、何が起きたのかを遅々と考えている様子だった。そしてようやく事態を飲み込んだらしい彼は、こう言った。

「　　、　　。　　」

汗と同じように、彼の顔に笑みがたちまち染み広がる。まるで自分が、すべてを許す寛容な大人物だとでも言いたいかのようだった。何を言っているかはもちろん聞こえないけれど、聞きたくもない。聞く価値もない。そんなものは、どうだっていい。

その時背後に足音を聞いて、ぼくらは振り返った。

それは、ひとみ先生だった。そしてその後ろには、神主さんや陽のお母さんや、とにかくみんなのお父さんお母さんたちがいた。

するとその姿を見てふと、何か郷愁に近い場違いな感覚が身体をよぎった。

ああ、そうだ。

小さい頃、みんなで一緒に夕方まで遊んだ。ずっと、飽きることなく、遊んだ。もう夕方だと気づいても、誰も口にせず遊んだ。それがきまりなのだ。

お父さんやお母さんが、迎えに来るまで。

今ぼくの胸に浮かんだのは、ちょうどそのときの感覚だった。

帰るよ、と言われたときの、

力の抜けた失望だった。

えー。まだ遊ぶー。

みんなそう言って、逃げ回った。

そんな記憶が、蘇った。

あれから、どれだけの時間が経ったのだろう。

みんなのお父さんお母さんたちは、ほとんど丸一日ぶりに会う自分のこどもたちに気づくと、とりどりの反応を見せた。

陽のお母さんは、陽に向かってあのいつもの、目を細めた柔らかい笑顔を浮かべた。やっぱり、陽にそっくりだった。きっと何が起こっているのか、たぶんこの人はちゃんと理解しているのだろうな、とぼくは思った。その上で、それでも笑うことの出来る人だった。

神主さん、崇嗣のおじいさんは、その逆だった。何かを畏れるような態度は、身体をひどく小さく見せた。何に怯えているのだろう。ぼくの知っている神主さんとはすっかり違って、弱々しい、悩み苦しむ、哀れな人にしか見えなかった。少しだけ顔を上げて、崇嗣に許しを請うような目を向けていた。

健太のお母さんは何事も気にとめず、豪快に笑っている。きっと、何も知らないに違いない。健太を見て、あんた何やってんの、とでも言わんばかりの朗らかな様子だった。

そして弥生ちゃんのお父さんは、自分の胸に手を当てて、この上ない幸福そうな顔を見せていた。本当に心配していたのだろう。

それから、てんでに自分の子に向かって、彼らは話しかけた。

「　　、　　。　　」

「　　。　　。　　、　　。　　。　　」

「　　、　　。　　？　　、　　。　　」

「　　。　　。　　、　　。　　？」

そうだ。

みんなを、迎えに来たのだ。

もうおしまい？

まだもっと、遊びたいよ。

そう思って、ぼくはひとみ先生の顔を見た。

もうちょっとだけ、と、

聞こえなくてもいいから、言いたかった。

けれど、先生の表情は、

何かを願うような悲しい笑顔だった。

だからぼくは、何も言えなかった。

そして気づけばぼくらは、
神社の石段の、まさにその前にいた。
石段は見上げる限りどこまでも続いて、先は霧の中へ消えている。
ぼくが石段に目を遣ったのに気づいて、町会長もそちらを見る。まずいと思ったぼくは、焦って石段の一段目に登り、遮るように立った。けれど、他にどうしようもなかった。ただ、ぼくは立ちつくした。
なんとしてもおとなたちを、この先に行かせてはならない。
森に畏怖を持たない者達に、行かせてはならない。
どこへ迷い込んで、
あの場所に行ってしまうか分からない。
そして、
あの子に会ってしまうかも知れない。
かずちゃんを見つけてしまうかも知れない。
そんな者達を行かせてはならない。
それだけだった。
「齋夜？」
陽が不思議そうな声を出す。まだ分かっていないのだ。
ぼくは、震える声で口早に言った。
「この人たち、駄目だ。分かってない。行かせちゃ、駄目だ」
ぼくの声が聞こえるみんなは、そう聞いても首をひねるばかりだった。分かってくれない。おとなたちを山に上げてはいけないのに。なんで分かってくれないんだ。
陽のお母さんが、言った。
「　　」
言いながら、陽の肩に手を掛けた。
それを合図に、他のおとなたちもみんな、動き出した。
めいめい自分のこどもに向かって、声を掛け、肩を抱き、手を引く。町会長や陽のお兄さん、脩一さんも、その中へ入っていく。たちまち陽たちは、おとなに取り囲まれて見えなくなった。ぼくはひとり、石段の上に取り残された。
ぼくのことは、誰も見てくれない。

霧のせいで、集まったみんなは薄く霞んでいる。ぼくの目の前で、おとなたちはぼくには聞こえない言葉でみんなに話しかけていて、ぼくはそれでもそのうちの誰かが石段へ足を向けるのではないかと怯えていた。馬鹿みたいだった。

やがて話も済んだのか、おとなたちは各々のこどもの手を取って、町の方を向いた。連れて帰ろうとしている。その光景を、ぼくは石段の上から何も出来ずに眺めている。

さあ、みんな。言うんだ。

えー。

帰りたくない。

まだ遊んでたい。

そう言わないといけない。

小さい頃みたいに、今に誰かが言うに違いない。

ぼくはそう信じて、待っていた。

そうしていると、

ふいに、声が聞こえた。

「齋夜。帰るよ」

ぼくは眼を見開いた。

陽だった。

陽は母親のそばに立ち、ぼくの方を見上げ、いつものように優しい笑顔を浮かべていた。

ぼくは、問い返した。

「なんで」

「帰るよ」

陽は繰り返した。

ぼくは、急に心がぼやけるのを感じた。

「俺も、帰る」崇嗣が言った。「そろそろ。いいよ、もう。じいちゃんつ

らそうだし」
「でも帰ったら」ぼくは急いで理由を考える。「また殴られるかも」
「大丈夫だって」崇嗣は苦笑いを見せた。「もう大丈夫だよ」
「なんで」ぼくはすぐに問う。
「なんでも」崇嗣は笑って言い切った。「もう、大丈夫」
「俺も」
健太までそう言った。健太はお母さんに肩や背中をこづかれて、もう歩き出していた。
「いつまでも齋夜のうち、いるわけにいかないし」
「いいよ。いればいいよ」
ぼくは、一生懸命に言った。
すると健太も、笑った。無理無理、とでも言うように、手を振りながら健太は言う。
「もうおふくろが、帰れって。声聞こえなくても分かるわ。これで逃げたらぶん殴られる」
ぼくは弥生ちゃんを見た。
弥生ちゃんもやっぱり、笑っていた。
「私も」
「なんで？」
ぼくはもう、それしか言うことが出来ない。
弥生ちゃんは今にも泣き出しそうなお父さんを横目で見て、こう言った。
「もうお父さんを心配させたくないの」少し黙って、それから続ける。「私はもう、平気だから」
「でも、帰っても、声が」
弥生ちゃんは静かに微笑んだ。
「たぶん、大丈夫。親子だから」また少し黙る。「私が平気なら、大丈夫」
ぼくは、何も言えなくなった。
最後に、陽が言った。
「もう、時間だ」
優しい笑顔のままだった。

みんなの笑顔は、儚くて、
それが、いやだった。

ひとみ先生が、ぼくに向かって緩く手をさしのべる。
ぼくはそれを、見ていた。
すぐそこに、先生の白い手がある。
それをつかめば、終わる。
帰ろう。

「い、や、だ」

ぼくは言う。
「なんで？　みんな、自分で逃げてきたんでしょう？　なのになんで、ちょっと迎えに来たくらいで帰るの？」
誰も応えない。
「ぼくの家にいたければ、ずっといていいから。大丈夫だから。ねえ。なにか駄目だった？つまらなかった？　ぼくが悪い？」
誰も応えない。
「まだいいじゃない。急ぐことない。霧だって、まだ出てるし。ほら、おとなたちだってまだなんにも分かってないから。分かるまでみんな、ぼくの家にいたらいい。そうした方がいいよ。本当のこと分からないと、どうせたぶんまたおとなは、何かひどいことをするよ。だから、まだ帰らなくていいって。気にしなくていいよ。うちにいて。迎えなんか、みんなほっといて、ぼくの家に戻ろう。なんにも分かってないのに、迎えになんか、来て」
誰も応えない。
「ぼくを迎えに来てくれる人なんか、誰もいないのに」
「齋夜」陽がゆっくりと言う。「どうしたんだ？」
「どうかしたのはそっちでしょ」ぼくは言い返す。「厭じゃないの？　連

れ帰られたって、またお互い何喋ってるのか分からないまま過ごして、いらいらして、喧嘩するだけじゃない」
「まあそれはそうだけどさー」崇嗣は顔の傷跡を掻く。「なんとか、なるんじゃねーかな」
「ならないって」
「何熱くなってんだよ齋夜」健太がおかしそうに笑う。
「笑うなッ」
ぼくは叫ぶ。健太は黙る。
「ゆうちゃん」
弥生ちゃんが少し眉を下げて言う。何が続くのかと思って、ぼくは待つ。
けれど弥生ちゃんは、何も言わない。
何も言わないことが、余計に何かを感じさせた。
ぼくは続けた。
「みんななんでそんな急に変わったの？　何があった？　さっきまで一緒に」
「変わってないよ」
するとどことなく疲れたように、陽が呟いた。
「急じゃない。最初から、分かってたことだよ」
分かってた？
「ようちゃん」
弥生ちゃんが陽をいさめる。けれど、陽は話し続ける。
「もういいだろ、齋夜」
「よくない」ぼくはすぐに返す。
「何が不満なんだ？」
そう言う陽の顔は、なぜだろう、うんざりしたようにすら見えた。陽がぼくにうんざりしている？　それともそれは、ぼくそう思いこんでるだけだろうか。
ぼくが悪いのか？
「不満なんじゃなくて、そうじゃなくて」
ぼくが言葉に迷っていると、陽はつまらなそうに言った。
「齋夜は、分かりたくないんだろ？」

「なんの話？」崇嗣が尋ねる。
「何もかもだよ」陽は即答する。
「なあ、齋夜」健太まで口を挟む。「落ち着けよ」
「黙れ」ぼくは思わず大声を出して、咳き込む。
健太は一瞬ひるんだように後ずさりして、小さく、なんだよ、と言った。
落着く？
なんで落着かなきゃならない？
おとなたちは石段の上のぼくと下にいる陽たちを交互に見て、そして見るばかりだ。何もしてくれない。困っているだけだ。下らない。本当にどうしようもない。こどものことなんか、所詮どうでもいいと思っているからだ。関係ないと思っているからだ。
町会長みたいなどうしようもない奴だけじゃない。ひとみ先生だって同じだ。他のおとなたちが口々にぱくぱくぱくぱくとしつこく何かを言っているのに、先生だけはぼくを見ているだけだ。じっと、同じ表情のままだ。さっきまで伸ばしていた手を降ろし、肩の力を抜いて、ただ立っている。そうしてぼくを見ている。
変わらない、見据える先も定かでない、淋しげで曖昧な表情だった。
先生は、何を思っているんだ？
哀れんでいる？　誰を？
ぼくを？
さっきのぼくの乱暴な言いぐさに怒ったのか、健太がこちらを睨み付けて近づいてきた。怖い。ぼくの腕をつかもうとしてくる。
「来るなッ」
訳が分からないままぼくは叫んで、健太を突き飛ばした。
自分でもどこから出たのか、不思議なほどの力だった。健太は油断していたのか、そのままひっくり返って、石段の脇の小岩にぶつかった。そしてずるずると、頭を押さえて倒れ込んだ。ああ、またやってしまった。ぼくは、自分の頭から血が引いていくのが、はっきり分かった。
健太のお母さんが目を丸くして、倒れた健太のそばにつく。そしてぼくに、ちらと目を向けてきた。なぜぼくを見る？　ぼくは悪くない。悪くない。

弥生ちゃんも、すぐに寄り添って介抱しようとしていた。健太は倒れたまま、首筋を右手で押さえている。お母さんは健太を少し抱えて上半身を起こしているけれど、言葉が聞こえないから、それ以上何も出来ないようだった。一生懸命何かを、健太に向かって言っていた。お母さんの代わりに、弥生ちゃんが健太に訊いた。

「大丈夫？」

健太はうんうんと薄く頷き、それから曲げた首を痛がって呻いた。その様子を見ていて、ぼくは気持ちが虚ろになる。でもなんで、弥生ちゃんが看てやらなきゃならないんだ？

「弥生ちゃん」ぼくは言う。息が上がる。「そんなのいいから、来てよ」

弥生ちゃんはそれを聞いて驚き、どうしたものかと健太とぼくを交互に見ながら、迷っているようだった。

「何言ってんだよ齋夜」

そう言う崇嗣は、露骨に怯えた目でぼくを見る。見るな。違う。

ぼくはおかしくなんかない。

「いい加減にしてくれ」陽が低い声で言う。

「ぼくは悪くない」ぼくはすぐに言い返した。

「俺たちは帰る。ちょっと帰るだけだ。またすぐ会える」

「それじゃ意味がない」

「なんで」

ぼくには答えられない。ただ、帰っては駄目だということだけは分かっている。それは間違いない。確かなことだ。一度だって帰ってしまったら、駄目になってしまう。そうなんだ。

「無茶苦茶だ」崇嗣がぼそりと言う。

「違うッ」

ぼくは怒鳴りつける。崇嗣は縮こまる。

「無茶苦茶じゃ、ないよ」

すると、なぜか陽がそう言った。それでぼくは、一瞬言葉を見失う。

すかさず陽は、ぼくに尋ねた。

「うちに来るか？」

「いやだ」

「俺が厭？」
「違う」
「何が厭？」
「分からない」
「誰の家がいい？　崇嗣？　健太？　弥生ちゃん？」
「いやだ」
「俺が後で、またすぐ齋夜の家に戻るから」
「いやだ」
倒れた健太、寄り添う弥生ちゃん、怯える崇嗣、取り巻くおとなたち、みんな曖昧な表情で、ぼくら二人を見ている。たぶん、呆れている。いつまでもだだをこねるぼくに、呆れているのだ。
ぼくが悪いのか？　違う。
そんな目で見るな。
陽は続けた。
「じゃあもうしばらく齋夜の家にいて、日が暮れる頃になったら」
「いやだ」
「一人が厭なら、ひとみ先生に頼んで泊まってもらうとか」
「いやだ」
「おとなたちにも分かってもらうようにするから」
「無理だ」
「さっき健太も言っただろ。いつまでも一緒にいることは出来ない」
「なんで」
「分かるだろ」
「分からない」
「齋夜。一緒にいたいのは分かるけど」
「分かってない」
「分かる」
「分かってない」
陽はだんだん声を大きくしている。
きっと、怒っている。

怒らないで。
怖いから。
怒らないで。
ぼくはもう、泣きそうになっている。

「どうしたいんだ？」
「どうもしたくない。もういやだ。いやだ」
「だから、どうしたい？」
「ぼくを、おいてかないで」
「置いてくなんて言ってない。また後で来るって」
「いやだ」
「わがままばっかり言うな」
「わがままじゃない。勝手なのは、そっちだ。ぼくが、なにもしてないのに、勝手に決めて、それを正しいみたいに」
「仕方ないだろ」
「仕方ないとか言うなッ」
「どう言えっていうんだよ」

ぼくはもう何も考えず、思いつくまま言葉を吐いた。

「嘘つき」
「嘘なんかついてない」
「陽は嘘ばっかりだ」
「齋夜ッ」
「怒鳴らないでよ」
「俺は」
「陽は、いつも、いい加減で、嘘つきで、無責任で、勝手で」
「違う」
「その場その場で、適当に」
「ちがう」
「ぼくのこと忘れて、去年も帰ってこなくて、ずっと放っておいて」

「ちがうッ」
「どうでもいいんでしょう」
「ちがう俺は」
「もういやだ。二度と会いたくない。二度と見たくない。ぼくのことなんかもう放っておいてよ。ずっと、死ぬまで一生、独りで、島にいるから。忘れて。診療所なんか継がなくていい。向こうで、お医者さんになって、ずっといればいい。その方が絶対いい。帰ってこなくていい。うんざりだ。大嫌いだ」
「俺は。齋夜。もう、仕方がないんだよ」
「ききたく、ない」

最後に陽は言う。

「こっちへ来いッ」

ぼくは涙と鼻水を流しながら、歯を食いしばって応えた。

「いやだ」

そのとき、
ぼくは何かを感じ、振り返る。
背後に続く石段の先を見ると、そこにはねこがいた。
綺麗なねこだ。

ゆっくりとねこが、石段を下りてくる。
白い真綿のような身体が、霧の中からおぼろげに降りる。
まるで地に足がついていないような、やわらかな足どりで、
すうと現れ、
なあと鳴いた。
綺麗だった。

ねこを見るぼくの後ろで、陽が、初めて聞く大きな声で、こう、叫んだ。
「分かったよ。もう、いい。放っとく。勝手にしろ。もうずっと、二度と会わない」
そして、言った。

「さよ　なら」

ぼくは振り向いた。
息を呑んだ。

「な　だよ。今さら。もう遅　よ。絶対、許さ　い。あんな　と、言っ　。馬鹿　するなよ。齋　。なん　よその目。はっ　り言　よ言いた　ことがあったら。ほら。言え　。絶対許　ないか　な。なあ、　夜。聞い　るか。齋夜ッ」

ぼくは、
ぼくはすごく、身体から力が抜けて、

「ずっ　俺はお前が　うして　かって心配　て」

陽、

「毎日　も電話　た方がよかっ　か？　お前そうい　のいや　るか　。そは去年帰　てこ　かったのは、確　に、それ　」

ぼくは、声を出すのが怖くて、

「そ　だ　、逃　てたよ。帰ってき　も俺　はど　せなん　も出来　いし、お前　の方　気　病むと思　」

声を出したら、陽がどう思うか、

「行き　たりば　　りで、いい　減なのはも　分　って　よ。偉　うなこ言っ　も　の役　も立て　いし、それ　厭で、だ　ら俺は」

陽にどう聞こえるか、

「怖　ったん　よ。あの　に　うのが。あの　からずっ　悩ん　、どうたらいい　分　らな　て、ずっ　、怖　った　だよ。齋　」

ぼくには、分からないから、

「陽」

ぼくは言った。

はっきりと、少しでも伝わるように大きな声で、言った。

すると、陽は口をつぐみ、

愕然とした。

陽のそばに、おとなたちが少しずつ近づいてくる。珍しく激昂した陽に、彼らも動揺しているようだった。彼らは何かを話しかける。それを陽は聞く。

聞こえる、ようだった。

そして、陽は急速に力を失っていく。

崇嗣、健太、弥生ちゃんの三人も、今まで見たことのない陽の振る舞いを、怖がっていた。そして、恐る恐る言葉を発する。

崇嗣が言った。

「陽。どう　た？　にこれ、戻　た？　どうな　　んの。齋夜？　じいやん、聞こえ　？どういうこ　だ　なん　これ」

弥生ちゃんが言った。

「ゆうちゃ　、　うちゃん、聞こ　る？　ねえ、なん　？　何が起　て、ね　、よ　ちゃん、どう　たの？　何をし　の？」

健太が言った。
「ん、戻っ　のか。あ　痛　。母　ん聞　える？　やっ　直った。ああ疲　た。さ。家帰　う。齋夜はも　いい　、放　とけよも　」
おとなたちは口々に何かを喋り、ひとみ先生は嬉しげに四人に向かって語りかけている。ぼくは、石段の上からそれを見ている。
見ている。
ぼくに出来ることは、何もない。
胸の辺りが、鷲づかみにされたように痛い。
突然、山からふうと風が降りて、霧を掻き乱した。
目の前のみんなの姿が紛れ、遠くなる。
陽は呆けたまま、何も言わない。
それはきっと、自分の途切れた言葉を、ぼくに聞かせないためだ。
おとなたちは、やっぱり何も気づいていない。こどもたちが帰ってきた、と微笑み、涙し、安堵している。自分のこどもに、あるいはそばにいる人に話しかけ、満足した表情を浮かべている。崇嗣や弥生ちゃんは親に手を取られ、肩を抱かれ、困っている。町会長は両手を広げ、いかにもめでたく大団円、万事上手くまとまった、とでも言っているようだった。
何もかも、これで終わったのだと思っている。
確かに、終わったのだろう。
本当によかった。
よかった。
ぼくは涙をぬぐわないまま、少し笑った。
「ゆう　ゃん、ね　ゆ　ちゃ　、どう　た　？　もう大　夫だ　ら、こっち来　」
弥生ちゃんが何かを言っている。
ぼくは笑ったまま、首を振った。
「　　」
ひとみ先生が何かを言っている。
ぼくは笑ったまま、首を振った。
みんな、おとなたちに話しかけられて、応えている。
そうして、言葉は失われていく。

「じいちゃ　ちょっ　なん　よ、　ん、もう平　だっ　。ほ　ん　聞　え　てる。帰　よ。そん　顔　るな　。気持　悪　よ」
「母　ん？　ょっと頭　っただ　だ　ら。え？　齋夜　い　よ。ちょっ　、た　ん疲　てる　けだ　ら。俺は気　し　いか　。あい　責　ない　って。思い詰　る　し」
「お父　ん、そん　も　泣か　で。　めんなさ　。悪　はな　て、あ　ね、いろ　ろあ　、大変　、ちゃ　後で話す　ら。だ　ら落着　て？　ね？　よ　ゃん、　え、ど　の？　よ　ちゃん？」
ぼくは泣いたまま、微笑んでいる。
陽は、一歩一歩を確かめるように歩いて、ぼくのところまで来た。
ぼくが立つ石段の前で、陽はぼくを見上げている。
そして、言った。
「齋　」
「陽、聞こえる？」
ぼくは尋ねた。
そのぼくの言葉を聞くと、陽は急にまた、弱くなった。
こんなに弱い陽を、ぼくは初めて見た。
さっきまで叫んでいたあの意志は、どこへいったんだろう。
一押しすれば崩れるような支えに、無理にすがっていたのかも知れない。
身体からすっかり力が抜けて、陽は揺れるように立っていた。
陽は言った。
「俺　悪　のか？」
ぼくは首を振った。
それは、違う。
「俺　やっ　り、何　出来　いま　なの　」
分からない。
ぼくは、少しうつむく。
陽は、他の誰にも聞こえないくらいの小さな声で、ぼくに向かって話し続けた。
「本　に、俺　、なん　も　いから。　れ　らどう　らいい　かな　も分　ない。怖　。なん　く流　今ま　やっ　けど。そ　なの

齋夜を　き込ん　、あれ　　も　、もっ　　　　からなく　って。ごめ
。ま　聞こ　　か？　　の場そ　　で適　に、齋夜　言　　おりだ
う。　も誰　、　　　くれ　くて、だか　も　　にか。疲　　。　　に、
駄　　。　　。ご　　。も　　対許し　も　　いく　　ず　　、酷
　　りで、　当　、ご　　。でも」

分からなかった。
もうぼくには、分からない。
そして陽は顔を上げ、最後に、こう言った。

「齋　、お　　　　　　」

そして、すべてが消えた。
聞こえるのは、
山の風の音と、海の波の音と、虫の鳴く声だけだった。

霧は深い。
ぼくは目を瞑る。
静かで、
ぼくは独りだ。
すると、すさまじい孤独が押し寄せてきて、
それは避けようもない大きなもので、
覆い被さるように広がっていく。
辺りはみんな落ち着きを取り戻し、あるべき姿に戻った気がしたけれど、
そんな姿に、ぼくは耐えきれなくなり、
もうなにも、分からなくなった。
目を開ける。
雲のせいで、夕陽の光は届かない。ただ暗いだけだ。辺りは暗い。
すぐ目の前にいるはずの陽の顔すら、霧と影で、ほとんど見えない。
その後ろに立っているはずの崇嗣や、健太や、弥生ちゃんや、ひとみ先生やおとなたちの姿など、もう何も見えない。わずかに見えたかと思えば、たちまち霞み、消える。

そして言葉すら、もう届かない。
巨大な静寂の中から人でないもの、風や草木や森や山や海や虫やあらゆるすべての音が、ぼくの中へ入り込む。それらは人の言葉を超えて強く在り、ぼくは自分の中に居場所を失う。
そしてぼくは白くなり、
霧と混じり合い、
在るも無いも変わらなくなる。
なぜならぼくは、独りなのだから。

みんなぼくをおいて、
いってしまった。

なあ。
ぼくは振り向く。靴の裏で、砂利が石段に擦れて音を立てた。
けれど霧はあまりに深くて、
もうねこの姿は、どこにもなかった。

ぼくは石段を降りる。
薄暗い霧の中、ぼくからは誰も見えない。
誰からもぼくは見えない。
誰も、ぼくに気づかない。

そっと駆けて、
家へ帰り、
ぼくは、戸を閉めた。
大きな音が鳴った。